



Title	苗族史の近代（六）
Author(s)	吉開, 将人; Yoshikai, Masato
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 132, 49(右)-138(右)
Issue Date	2010-11-15
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44295">https://hdl.handle.net/2115/44295</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS132_002.pdf



## 苗族史の近代（六）

吉  
開  
将  
人

はじめに

- 一、苗族先住説の論理——漢族西来説との相関
- 二、苗族史論の系譜——西欧東洋学から日本東洋学へ
- 三、近代中国の苗族史論——「同化」「排除」と清末民族論
- 四、「五族共和」と苗族先住説——「優勝劣敗」から「同祖」「同化」へ
- 五、西来説と土着史観——啓蒙から自律・救国へ
- 六、「東北」と「西南」のあいだ——学術実践と政治力学
- 七、民族学の展開と苗族史論の解体——民族学者の歴史像
- 八、苗族エリートと苗族先住説——地域・民族主義と苗族史論  
〔以上、前篇〕
- 九、「抗日ナシヨナリズム」と西南民族  
〔以下、本篇〕

苗族史の近代（六）

十、「苗族復興運動」の諸相

十一、重慶政府と苗族先住説——抗戦下の民族論と民族政策

十二、内戦と建国——一九四九年前後の苗族史論

十三、中華人民共和国の苗族史論——苗族先住説のゆくえ

十四、現代中国社会と苗族史論——蚩尤と苗族社会

十五、結論——中国多民族史観の系譜

おわりに

〔以下、続篇〕

漢族による他称「苗」から附会された「三苗」「蚩尤」起源の苗族先住説は、西欧人宣教師、西欧人東洋学者、日本  
人学者、清末在日中国知識人、国内知識人を經由して、清末民国初期には西南中国の地域・民族エリートにまで波及  
した。そして満洲事変以後、ナシヨナリズムが高まりを見せる中で、苗族先住説は西南民族による權益主張の根拠と  
して各地に広く流布するに至ったのである。<sup>(註)</sup>

順調に進めば一九三七年のうちに憲法制定のための国民大会が首都南京で開催され、あるいはそこで西南中国の民  
族エリートたちの声が政治に反映された可能性がある。ところが、盧溝橋事件の勃発により、憲政実現に向けた動き  
は頓挫した。しかし、そのことがかえって西南民族の政治意識を活性化させ、また彼らの間での苗族先住説の流行が、  
戦火を避けて西南中国に疎開した知識人たちの関心を引き寄せたのである。ここに後の中国民族論を方向付ける一大  
論争が巻き起こることになる。

## 九、「抗日ナシヨナリズム」と西南民族

北平（現北京）で発生した盧溝橋事件（一九三七年七月）を機に、戦火は中国国内各地に飛び火した。その中で国民政府は、四川省重慶への遷都宣言（一九三七年十一月）、首都南京の陥落（一九三七年十二月）、湖北省の武漢に臨時に置かれた中央機関の重慶移転（一九三八年八月）、武漢陥落（一九三八年十月）を経て、次第に西南中国への影響力を強めていったのである。辺境が「中央」としての性質を兼ね備え、蒋介石政権の「生命線」となったことで、当地の政治構造にはそれまでになかった歪みが生み出される。また、戦火を避けて多くの漢族知識人たちが疎開したことにより、西南中国に対する彼らの言論が活発化する。こうした状況は、西南中国各地の地域社会や民族・地域エリートたちにも影響を及ぼし、それまでになかった新たな緊張関係が生じたのである。

### (1) 西南軍閥と中央政局

国民政府の内陸移転は、西南各省の軍閥が自立性を保ちながら維持してきた権益を脅かすものであり、中央——地方関係を不安定なものとした。盧溝橋事件以後、湖南・貴州・四川省政府主席のポストは蒋介石派の人材に置き換えられた。しかし四川は劉湘の死後、再び混乱の中に向かい、民族集住地域である雲南省と西康省（現四川省西部、一九二八年建省）には、龍雲と劉文輝という二人の実力者が割拠し続けたのである。

雲南省政府主席の龍雲は現彝族、すなわち当時の呼称で言えば、前章で言及した高玉柱・嶺光電らと同じ「西南夷

族」「夷苗」の出身で、軍人として民国初年の護国・護法戦争に参加する中で、頭角をあらわした人物である。彼の雲南統治は、反蒋介石の立場を基本とし、雲南の自立性を維持しながら開発を推し進めるというもので、辺境民族の利益を重視し、伝統的土司制度の維持についても一定の理解を示していた。<sup>(36)</sup>

龍雲は、一九三八年六月から七月にかけて、西康の劉文輝、四川の鄧錫侯・潘文華らと会見し、雲南・西康・四川三省が連合して蒋介石に対抗するという協定を結んだ。<sup>(37)</sup> 同年十二月には、汪兆銘（精衛）が夫人の陳璧君らを伴い、重慶を離脱して昆明に飛び、その夜、龍雲と会談、翌日、雲南省政府が用意した専用機でハノイに向かい、二九日に日本との「和平」を主張する電報（艶電）を発するという出来事も起きている。汪兆銘の行動は批判され、一九三九年元日、国民党はその党籍剝奪を決定する。龍雲はいまいましい態度を保ち続けたが、同年五月になり、汪を非難する通電を発し、事態は収拾へと向かったという。<sup>(38)</sup>

汪兆銘の党籍剝奪が決議され、汪を通じた日中和平工作の失敗が決定的となった一九三九年元日、雲南省北側の西康省に、劉文輝を主席として、西康省政府が初めて正式な成立を見ている。<sup>(39)</sup> これにともなって、「西南夷族」の集住地域で、土司制度が存続していた西昌地区（もと寧（冕寧）属）は、四川省から切り離されて西康省に組み込まれた。しかし同年二月、蒋介石はそこに「軍事委員会委員長西昌行轅」を置いている。その目的は、西昌地区に対する劉文輝の統治を牽制し、南に隣接する龍雲統治下の雲南までを監視することにあつたとされる。<sup>(40)</sup>

このように、抗戦初期、西南各省の実力者たちは、蒋介石の動きを牽制しながら、影響力を維持することに努め、一方でまた蒋介石も汪兆銘の追隨者を出すことなく、西南中国を抗戦の根拠地とすることに成功した。こうして形成された西南中国における権力の分立構造は、以後六年半にわたる日本との戦争を支えるための重要な条件となったの

である。

## (2) 湘西「革屯抗日」運動——石宏規と「抗日ナショナリズム」

抗戦下において、以上のような権力構造の中に置かれることになった西南民族は、いかなる動きを見せ、どのような民族意識を形成したのだろうか。

湖南省では、軍政を停止して屯田政策をやめることを求めた湘西苗族の「革屯」運動が、抗戦初期にも継続した。苗族の「革屯」運動を鎮圧するため、省政府主席何鍵によって湘西に派遣されていた湖南省政府軍は、盧溝橋事件後、抗日戦に動員され、それにより、「革屯」を求め続けてきた武装組織（革屯軍）の動きは、かえって活発化したのである。「革屯」運動の指導者の一人、鳳凰県苗族の龍雲飛は、「革屯」と並び、新たに「抗日」と「倒何」（何鍵打倒）をスローガンとして掲げながら、一九三七年九月八日、「湘西抗日革屯倒何義勇軍」を率い、ついに湘西の政治的中心地乾城県を占領するに至る（乾城事件）。また同月二三日には、湘西苗族地域のもう一つの県城である永綏県の郊外に、花垣県苗族の呉恒良の率いる「川黔湘苗族民革屯抗日軍」が成立を見ている。<sup>10)</sup>

このように、日本との戦争が始まる中、湘西苗族のエリートたちは、「抗日」を掲げつつも、その機に乗じて、苗族の権益を主張し、あわせて苗族に敵対する何鍵の打倒を図るといふ、したたかな戦略を展開させていたのである。辺境社会における「抗日ナショナリズム」の二面性を、ここに見て取ることができる。

こうした状況の中で、何鍵の委嘱を受け、湘西と省都長沙との間を往来し、革屯軍との調整、苗族の懐柔を担当したのが石宏規であった。<sup>11)</sup>そして何鍵の失脚後、一九三八年一月に省政府と「革屯」運動の指導者たちとの間で協定が

結ばれ、苗族の悲願であった屯田制の廃止（革屯弁科）が実現することになる。それにともない、革屯軍は国民政府の指揮下に編入され、抗戦のために動員されたのである。<sup>(23)</sup>

湘西の混乱收拾に貢献した石宏規（愛三）は、一九三九年十月、「湘西特殊部族」すなわち湘西苗族を代表し、もと革屯軍領袖の龍雲飛とともに重慶に入り、国民政府主席林森（十一月六日）および軍事委員会委員長蒋介石（同月十日）に対する献旗を行なう。<sup>(24)</sup>これに先立つ一九三八年四月には、蒙古・回・チベット諸族の代表が武漢に参集し、漢・蒙・回・蔵の四種の文字によって「領袖東方」と刺繍した錦旗を、蒋介石に献旗する儀式を行なっている。<sup>(25)</sup>石宏規らの献旗もまた、混乱收拾後の湘西苗族を代表する地位を政府に示すものであったと解釈される。

前章で論じたように、一九三七年から一九四〇年にかけて、湘西苗族の石啓貴は、憲政実施を見据え、国民大会に「土著民族」枠を求める請願を国民政府主席林森に対して試みていた。抗戦下において、石啓貴と石宏規の間に、何らかの関係が存在したことを示す史料は見当たらない。二人はともに湘西を代表する地域・民族エリートとして、競合しあいながら重慶政府との関係を模索していたと見るべきであろう。

### (3) 高玉柱と「抗日ナシヨナリズム」

これと同時期、前章で紹介した雲南の高玉柱らによる、現彝族を中心とした「西南夷族」エリートたちの動きも、抗戦下の西南各省において活発化しつつあった。<sup>(26)</sup>すでに述べたように、高玉柱らは一九三六年から翌三七年にかけて、南京・上海を舞台に、「西南夷族文化促進会」を組織し「西南辺疆開發協会」へと発展させる一方で、「西南夷族沿辺土司民衆請願代表」を名乗り、政界・社交界に対して民族の権益を主張し、政府・社会からの支援を求める活動を展

開かせていた。湘西の「革屯」運動の高まりに直面していた湖南省政府主席の何鍵が、三中全会（国民党第五期中央執行委員会第三次全体会議）参加のために南京入りしたのは、高玉柱らが上海から南京に戻った一九三七年二月中旬のことであった。<sup>(27)</sup> 何鍵はこの時、高玉柱と接触したと見られる。その主張を汲むかのように、湖南・広西・四川・貴州四省辺区に「夷苗」を管理する機関を設けることを中央に提案し、<sup>(28)</sup> また高玉柱を湖南に招き、湘西の情勢を沈静化させようとしているからである。<sup>(29)</sup>

順調に進めば、一九三七年七月に高玉柱の湖南入りが実現したはずであり、そこでは必ずや湘西苗族との橋渡し役であった石宏規との面会が果たされたことであろう。あるいはそれが雲南・四川・貴州を中心とする「西南夷族」と、湖南の湘西苗族との連携を導き、「夷」「苗」を包括する真の「夷苗」意識が、民族エリートとの交流の中から形成されたくもされない。ところが同月七日、盧溝橋事件が勃発するのである。

そしてまたちょうどこの頃、高玉柱の「代表」としての資格にも疑いが生じ始めていた。雲南西北部と西康南部のチベット・ビルマ系民族の土司を中心とする高玉柱らの活動に対し、雲南西南部のタイ系民族を中心とする土司たちから、政府に向けて異議申し立てがなされたのである。<sup>(30)</sup> 高玉柱らの度重なる釈明にもかかわらず、<sup>(31)</sup> 数ヶ月来、脚光を浴び続けた彼女たちの行動は、以後、一切メディアから消えることになる。何鍵の計画も実現することはなかったと見るべきであろう。

高玉柱たちの消息が再び現れるのは一九三八年五月のことである。高玉柱は、「大梁（涼？）山」に分け入って「未開化之夷兵」四大隊、計四千人を編成し、「夷苗領袖」とともに「西南辺区夷苗抗日後援会」および「夷苗抗日義勇軍」を組織していた。一方、高玉柱とともに一九三七年の南京・上海で「西南夷族」代表として活躍した喻杰才も、湘西・

四川南部・雲南・貴州・西康などの地を巡回しつつあった。<sup>(32)</sup> 彼らは、盧溝橋事件の後、西南中国に戻り、そこを拠点に「夷苗」の組織化を進めていたのである。<sup>(33)</sup> 一九三八年十二月には、高玉柱を筆頭に、喻杰才(雲南)・嶺光電(四川)・楊砥中(貴州)など、かつて南京での請願に参加した「西南夷族」エリートたちを発起人とし、政府関係者を取り込んで、重慶において「西南辺疆民族文化經濟協進会」の組織化が試みられる。<sup>(34)</sup> これもまた、西南中国に戻って立て直しを図った彼らの活動が、具体的な成果を上げたことの現れと見るべきであろう。

高玉柱らの活動は、重慶政府の政策と結び付いて、西南民族社会に裾野を広げていった。一九三九年夏、喻杰才は国民政府軍事委員会の支持を得て、同委員会が抗日活動の幹部養成のために新設した「戦時工作幹部訓練団」(戦幹団)に参加する夷苗学生を、貴州西北部の畢節専区で募集する。その結果、貴州省全体から約百人が採用されたという。戦幹団の訓練に参加した貴州出身の夷苗学生は、重慶の高柱・喻杰才との接触を維持し、貴州各県の国民兵団に配属された後の一九四〇年秋には、喻杰才を迎えて畢節県で「辺疆同胞会議」を開催した。「西南夷苗民族解放大同盟」(大同盟)が発足する場となったこの会議で、彼らが決議したのは、政治面では民族平等を実現し、夷苗民族事務を専管する組織機構を設置すること、軍事面では夷苗民族の軍隊を組織し、抗日救国闘争に参加すること、経済面では地方資源を開発し、辺境経済を発展させ、夷苗民族の生活を改善すること、さらに文化面では、辺境民族教育を発展させ、知識を広め、地方の人材を養成することを求めた「四大方案」であった。会議の参加者はその後、貴州各地で大同盟の宣伝を進め、地元の民族・地域エリートたちの支援を受け、貴州西北部の威寧県などで二百人、鎮寧県では三百人の加入者を得たという。<sup>(35)</sup>

一方、高玉柱・喻杰才も、この頃には雲南省の省都昆明で「辺疆宣慰団」(辺宣団)の団長・副団長に就任し、貴州

で活動中の大同盟の構成員たちも、昆明に参集して辺宣団へと合流を果たした。辺宣団は、日本軍の雲南侵攻に抵抗するために設立された組織で、雲南とベトナム・ビルマとの国境地帯の各民族と連携し、現地に遊撃隊を組織することを目指していた。その成立には、かつて南京で高玉柱らと接した宋慶齡による働きかけがあったとされる。雲南に戻った高玉柱を中心として、雲南省政府主席の龍雲の下に、辺宣団が成立したのである。<sup>(38)</sup>

以上で明らかになったように、抗戦初期、高玉柱たちは、抗日を大義名分として重慶政府への働きかけに成功し、西南中国一帯の「辺疆同胞」「西南夷苗」の連携と組織化を進めていた。その活動内容は、かつて南京で試みられた限られた地域出身の土司層によるものと比較して、地域および社会的に一層の広がりを持つものであった。<sup>(39)</sup>一連の活動は、戦幹団・大同盟・辺宣団という発展過程の中で、現地での各種宣伝活動を通じ、西南中国における民族意識を刺激した。「抗日ナショナリズム」の高まりが同時に個別の民族意識を覚醒させ、抗戦への参加が大義名分となって「民族の権益拡張が主張されるという展開は、先に見た湘西苗族の事例とも共通する。辺境社会における「抗日ナショナリズム」の二面性を、ここに改めて確認することができる。

しかしやがて、高玉柱たちの活動は地元政界や重慶政府から危険視されるようになる。すでに述べたように、雲南省政府主席の龍雲は、「夷苗」（現彝族）の出身であり、雲南辺境の土司の存続にも理解を示していた。<sup>(40)</sup>しかし、彼は必ずしも「夷苗」意識の高まりを歓迎していなかったのである。一九三〇年から一九四二年まで、戦幹団から大同盟を経て辺宣団に参加し、高玉柱らと行動をとりにした貴州大定県（現大方県）出身の金国光（現彝族）は、当時の龍雲の態度について、以下のように回顧している。

高玉柱は雲南に戻ると、国民党左派の愛国人士である楊杰（雲南大理人、……）の支持を得た。楊は蒋介石が

雲南の直接統治をたくらんでいると深く知っており、楊は龍雲に「倒蔣（蒋介石打倒）」を勧め、高玉柱が辺疆の彝（夷）苗族を抗日に動員組織していることを支持するように建言した。ところが龍雲は躊躇して決断しなかった。高玉柱が雲南とベトナム・ビルマとの国境地域で各地の土司や土目の後裔を連携させることが成功し、彝（夷）苗民族の遊撃隊を組織させたら、その（龍雲の）雲南での統治に脅威となると心配したのである。このため、龍雲は昆明行營の主任という大権によって、辺宣団の必要とする活動経費に対し、できるかぎり押さえて支給しないようにした。団員たちは食事にも事欠くありさまで、気持ちは低調になった。高・喻の二人は打つ手がなく、落ち着かなかった。

龍雲の支持が得られず、辺宣団の活動は行き詰まって、離脱者が相次いだ。その一部は、共産党の遊撃隊への参加を選択したという。<sup>(30)</sup> この間、高玉柱らの活動は、雲南の龍雲以外にも警戒されるようになっていた。辺宣団の活動が昆明を拠点に展開されていた一九四一年夏、雲南省に接する貴州西北部の水城県で、大同盟の活動に対し、政府による厳しい弾圧がなされたのである。

私（金国光）が〔辺宣団に参加するため〕昆明に到着した後、一九四一年夏のことであったが、貴州からの情報で、水城県長の阮略が〔省政府からの〕論功行賞目当てで、大同盟が抗日救国で志願兵団を組織しているのは夷苗民衆が暴動を組織するものであると誣告し、〔その結果、大同盟が〕貴州省政府の命による取締と保安団の派遣による武力鎮圧を受けたことを知った。一部の人は殺され、……私も指名手配を受けた。<sup>(31)</sup>

抗戦下における西南民族の連携は、その中心地となった雲南・貴州で、当局の警戒を呼び起こしたのである。

#### (4) 苗族先住説と「苗族復興運動」

湘西苗族の重慶政府への接近が試みられ、西南夷族の活動が西南各省に展開され始めていた頃、雲南省都の昆明で、馬毅<sup>(37)</sup>という人物により、以下のような文章が発表されている。

「内地香港〔陸地香港〕の××地方では、苗族同胞たちがだまされ挑発されて、「苗族は中国の主人で、歴史的に五六千年前には黄河流域に居住し、西から来た漢民族に駆逐された」と強調している。そのため彼らは苗族復興運動を醸成させ、苗語と苗文〔苗族文字〕を一律使用し、苗書〔苗文で書かれた書籍〕を読み、苗人の服装を着て、漢人との通婚を禁止するように宣伝している（馬毅『堅強『中華民族是一個』的信念』一九三九年五月）。馬毅はこれに続き以下の内容の文章も発表している。

貴州××では、かつて×人が団結して故地回復運動を起こし、……一部の国人は、辺境の事情を理解せず、総理〔孫文〕の民族主義の内容がわからず、みだりにレーニン・スターリンの理論を引いて、かえって少数民族民族の糾紛を引き起こし、帝国主義の挑発する、わが民族を離間・分裂させ、わが民族を誘拐しようとする陰謀にはまっているのである（馬毅「苗夷教育之検討与建議」一九三九年十月<sup>(38)</sup>）。

馬毅がこの二年後にまとめた国民政府教育部への提案書には、関連する内容が以下のように、さらに具体的に記されている。

某省某区（機密）ではかつて大規模な苗族復興運動があり、その中心となっていたのはいづれも国内外の専科以上の学校の学生（名は機密）で、「苗」民族が五千年前には中国の主人で、黄河流域に居住していたが、漢族に駆逐されて、ついに衰微した」と強調し、そのため苗語・苗文を一律使用し、苗書（実のところ〔苗族は〕無

文字である）を読み、苗族の服装を着て、漢族との通婚を禁止するよう宣伝し、さらに代表を各省に派遣して宣伝し、それによって故地の回復と苗族の復興を目指している（馬毅・顧頡剛「建議訂正上古歷史漢族驅逐苗族居住黃河流域之伝説以掃除國族團結之障礙案」一九四一年六月）<sup>36</sup>。

以上三つの文章の内容は、記述の不一致も見られるが、通説すると、すべて同じ出来事を念頭に置いて発言されたことが明らかである。内容を総合するなら、一九三九年五月までに、貴州のある地域の苗族出身の学生たちの主導で、漢化を拒否し、苗族意識に立った「苗族復興運動」が展開され、そしてその過程で苗族中原先住説が宣伝されていたと理解される。漢族西來說と苗族先住説をセットとする清末以来の民族史論が、苗族にとって失地回復要求の歴史的裏付けとなり、苗族意識を鼓舞する役割を果たしていたのである。<sup>36</sup>

##### (5) 楊漢先と石門坎

これらの記述が反映しているのは、一体どの地域の出来事であろうか。「貴州」とされるから、石宏規・石啓貴など湘西苗族を指すものではない。主導したのが「専科以上」の学校の学生とされるから、「初中〔初級中学〕中学」以上文化程度」であった金国光ら「戦幹団」「大同盟」の参加者たちではない。消去法的に考えられるのは、貴州西北部の威寧県石門坎出身の苗族で、四川成都の華西協和大学を卒業した、楊漢先らの活動である。

前章で論じたように、清末以来、湘西の石板塘・石宏規・石啓貴、雲南の高玉柱、四川の嶺光電のように、各種教育を受けた地域・民族エリートの中には、民族文化や民族史に関心を寄せ、あるいは中央派遣の専門家と結び付いて民族地域の現地調査・研究を試みた者たちもいた。しかし、大学での高等教育を通じ、近代科学として民族学を習得

し、学術界に進出した人物としては、楊漢先が苗族で最初の人物である。<sup>37)</sup>

楊漢先は、「一九三八年夏、当時、全国が団結抗日を叫び、蒙古族・チベット族が民族団結を声高に叫ぶ政治的雰囲気、激励と啓発を受け、成都の苗族青年学生とともに、自己の民族を団結させ、各種の民族圧迫行為に反対しようとする趣旨の活動を画策した。討論を経て、故郷の父老たちに『父老同胞に告げる書』を発し、……石川聯合教区の在南京・成都学生の名義で『石川聯区の同胞に告げる書』起草し、方法を設けて印刷した」という。そしてその「石川聯区の同胞に告げる書」の内容は、「苗族は中華の一つの民族で、長年にわたって差別されてきた。今、日本帝国主義のわが国への侵略に際し、全国の各民族は必ず団結して抗日しなければならぬ。……我々苗族はさらに奮闘前進して、自決自治の目的を達するよう求めなければならない」というものであった。<sup>38)</sup>「抗日ナショナリズム」と自民族権益の主張の合流という点において、先述の湘西の「抗日革屯」運動や、雲南・貴州の「大同盟」「辺宣団」と、まったく同じ構図であることが見て取れる。

楊漢先の出身地は、貴州省西北角に位置する威寧県石門坎で、今日もなお苗族の集住域である。彼らが自らの主張を訴えた「石川聯区」とは、この石門坎を含む貴州省西北部から四川省南部・雲南省東北部にまたがる三省交接の布教区域を指す。石門坎とその周辺は、内陸奥深くに立地し、辺境として取り残された地域であったが、清末以来、この地に根を下したキリスト教（プロテスタント）宣教師により、布教活動に付随して各種の社会実践がなされ、奇跡的な発展を遂げていた。<sup>39)</sup>一九三〇年代、石門坎の繁栄は「苗族最高文化区」と形容されるほどであり、楊漢先は、まさにこの時期の石門坎が輩出した複数の大学進学者の一人であった。

馬毅が先の三つの文章において述べた「苗族復興運動」とは、この「苗族最高文化区」石門坎の様子を反映するも

のであったと考えるべきである。手掛かりとなるのは、貴州省政府主席吳忠信・民政庁長曹経沅が、一九三六年の民政庁視察員田東屏による石門坎調査にもとづき、国民政府に報告した以下の記述である。

威寧地区の土目・土豪は勢力が非常に強く、社会機構はなお部族時代に停滞していますが、イギリス人はここにたまたま苗民の援助をなし、土目・土豪の圧迫を減らしたことで、一般の苗民はついに惑わされ、毎日聖歌を歌い、聖書を読むようになり、県政府のあることを知らず、ましてや国家のあることも知りません。加えてイギリス人は、ポラード〔Samuel Pollard〕が苗族の村に入って以来、英文を苗文に改め、当地の花苗の人々はただ苗文だけを理解し、老若男女みな読み書きができる状態です。三十年來、イギリス人はその地の地勢、鉞物資源、およびその他の一切を、すでに余すところなく詳細に調査し、微に入り細を穿つほどで、「第二の香港（香港第二）」と見なしています。<sup>(註)</sup>

石門坎を形容した「香港第二」という表現とその報告内容は、この地におけるイギリスの勢力浸透を危惧する感情を反映するものであり、馬毅が「陸地香港」という表現によって論じた内容とも矛盾しない。また、馬毅の「専科以上の学校の学生」が「代表を各省に派遣して宣伝」という記述についても、先述した楊漢先らによる「石川聯区の同胞に告げる書」の印刷発布と合致する。馬毅の「×人」とは「苗人」、「貴州××」とは「貴州威寧」を意味するものに違いない。抗戦下の石門坎では、中原先住説によって失地回復を唱え、民族復興を訴える苗族意識が高まりを見せていたのである。

## 十、「苗族復興運動」の諸相

### (1) 石門坎「苗文」とその伝播

以上では、抗戦下の西南民族における「抗日ナショナリズム」の実態を、民族意識の覚醒という側面に注目し、湘西苗族・西南夷族・石門坎苗族を例として論じてきた。その過程で、とりわけ苗族社会において重要な役割を果たしたと考えられるのが、馬毅が批判の対象とする民族文字の存在である。

西南夷族、すなわち現彝族や現納西族などのチベット・ビルマ系の民族は、シャーマンが伝えてきた固有の文字をもつが、苗族は本来、無文字民族である。前章で述べた湘西苗族の石板塘のように、苗族知識人の側から民族文字の創出が試みられたことがあるが、それが苗族社会に普及することはなかった。例外とも言える成功例は、石門坎にキリスト教布教の基礎を築いたイギリス人宣教師サミュエル・ポラード (Samuel Pollard・柏格理)<sup>(8)</sup>が、地元苗族信徒である楊雅各らとともに創案した、いわゆる「ポラード苗文」(苗族文字)である。

ポラードは一九一五年に石門坎で病死するが、彼が楊雅各とともに苗語訳した新約聖書は、一九一七年になって楊雅各が自ら日本に渡り、横浜で印刷されたと伝えられる。楊雅各は、上述の楊漢先の父親である。継承者によるこうした努力もあって、石門坎の教育と布教を支えた苗文は、貴州西北部一帯に広く伝播し、当該地域の苗族の三分の二を文盲から救い、遠くは雲南南部の文山県の紅河地域にまで及んだとい<sup>(9)</sup>う。

民族学者である江応樑は、一九四五年に、当時の西南中国における苗文の普及状況について、以下のように記録し

ている。

苗文〔苗文字〕は苗人が自分で創作した文化でなく、外国籍の宣教師がラテン文字を用いてつくり出した一種の表音文字だが、今日の湖南・貴州・雲南境内内の苗族同胞たちは、みなこうした言い方を否定し、苗文は彼らの歴史性を具えた固有の文字であると、彼らは異口同音に争って主張する。

また一つの流伝する故事があつて、苗人の始祖は蚩尤で、もともとは黄河流域一帯の地に居住していたが、五千年前に、黄帝に敗れた後にその族人を率いて南方に移住したのであり、族人を率いて南に移ろうとする時、族中にもともとあつた書籍が持ち運びにくく、また移動した後に文字を忘れることを恐れて、族中の婦女に命令を下し、文字を衣服の隅や縁に刺繡し、それによって苗文はなんとか保存され、今日の苗文は、苗女の衣服の紋様圖案を整理してつくられたと、彼らは言う。

この文字は苗族同胞地域で非常に広く流行しており、苗区において教会の勢力が強いために、この種の文字も教会の力によって苗族同胞に広く伝授されており、……苗族同胞の中の若者で、この種の文字を理解しない人はもはや非常に少なくなっている（江応樑「西南辺区的特殊文字」一九四五年一月<sup>⑧</sup>）。

江応樑はこの苗文起源伝承について、

実際のところ、この故事は西洋の宣教師が苗人の歴史伝説を利用して捏造したものと、我々は疑っている。

苗族同胞たちは非常に保守的で、簡単には外来の文化を受け入れないのであり、宣教師たちは彼らのつくつたラテン文字〔苗文〕を普及させようとし、苗人の心理を利用してこの故事をつくりだしたのであり、〔それを〕苗族同胞たちが一度受け入れると、強く頭の中に刻み込まれて改めることができなくなったのである（同上）。

とし、ポラードたちが布教の意図から捏造した物語を、苗族が鵜呑みにしたことによるものだという解釈を示す。江応樑によるこの解釈は、故事の基礎となつている苗族先住説が、先に明らかにしたように、漢族西来説とともに、キリスト教的「普遍史」と結び付いて近代西欧に誕生したものであつたことを思い起こすなら、比較的理解しやすい。しかしそのような単純化は可能なのだろうか。その大本となつた「苗人の歴史伝説」とはどのようなものだったのか。この地における苗文起源故事の形成については、さらなる検討の余地がある。<sup>(56)</sup>

## (2) 伝統の再構築と歴史認識

ポラードの苗文創出を助けた楊雅各の息子である楊漢先は、当時の石門坎苗族の伝承と歴史認識のあり方について、以下のように回顧する。

一九〇九年〔宣教師たちの指導で〕……苗族の〔伝統的な〕歌をうたうことや〔民族楽器の〕笙を吹くことが停止され、山歌（恋愛歌）・史歌・故事歌にかかわらず、一律停止させられた。もともと苗族は歌をうたうのが最も好きだが、これよりただ「賛美歌」だけがうたえ、苗族原有の一切の歌はうたえなくなった。……一九二〇年代の中ごろに、進歩思想をもつ知識青年が、民族遺産を復活し、民族の歴史を研究すべきだと主張し、以後徐々に婚礼の場などで史歌と故事歌がうたわれるようになった。二十年あまり禁止されていたために、苗族の史歌は非常に多くが失われ、二十年あまりの間に、年寄りの歌い手で死んだ者が少なくなく、生き残った者も長年うたわなかったために、すでに大半を忘れていた。一九三〇年代になり、また〔苗歌の〕収集が提唱され、苗文で記録して一部を保存した。……一九三一年秋、日本帝国主義がわが国東北を侵略したため、「九・一八〔満洲〕事変」

が発生した。……苗族の青年学生は国家を愛し、民族を愛する思いが徐々に強くなった。中国の歴史を読む中で、苗族の歴史に及ぶと、当然より「古く」遡りたいと思うが、漢文の記す苗族の歴史は非常に少ない。一部の者が次のように考えた。苗族の年寄りがかつてうたっていた歴史故事の歌は非常によい史料である。しかし、キリスト教が伝来してからはうたうことが禁止され、年寄りが一部を覚えていたのは、すでにほとんど忘れてしまっている。これは根元を忘れることではないか、と。こうして一部の苗族の青年が歴史故事の歌をうたうことを復活するよう提唱し、以後婚礼の場があると年寄りに頼んで歴史故事の歌をうたうのを教えてもらい、徐々に苗族の歴史故事の歌が復活してきた。しばらくして一部の青年も自民族の歴史の歌を語り、うたえるようになった。

後にある者は苗文を用いて記録した。一九三〇年代と一九四〇年代には、みながこぞって年寄りに苗族の史歌を後代に伝えるよう頼むようになった（楊漢先「基督教在滇・黔・川交境一带苗族地区史略」一九七九年四月）<sup>(56)</sup>。

キリスト教の布教が伝統的な歌謡や叙事詩（苗歌）の急速な衰退をもたらしたこと、一九二〇年代の半ばからその復活が意識され始めたこと、一九三〇年代に入ってから、滿洲事変後の民族意識の高揚を背景に苗族青年たちの間で苗族の歴史に関心が向けられるようになり、その手掛かりとしてかつて歌われていた「歴史故事」の苗歌が注目され、老人を動員して復活が試みられ、苗文による記録がなされるに至った様子が、以上からうかがえる。

ポラードの死から時間が経過する中で、他者によって与えられた教条主義を見直し、自民族の伝統を再評価する動きが、「抗日ナショナリズム」の高まりを背景として、苗族の中から主体的に現れたことは注目に値する。抗戦下、近代まで文字をもたなかった苗族固有の歴史を伝えるものとして「苗歌」が注目され、それを利用した歴史と伝統の再構築が、苗族自身によって試みられたのである。馬毅が論じた「苗族復興運動」とは、こうした過程そのものを指し

ていたと理解すべきであろう。

### (3) 石門坎苗族と苗族先住説

馬毅が注意を促した苗族先住説の流行や、江応樑がポラード苗文と関連付けた苗文起源故事の流布についても、以上の楊漢先の回顧に見るように、一九二〇年代半ば以後、歴史伝承を含む苗歌が苗族自身によって重視され始めたことと関連付けて評価する必要がある。

石門坎の立地する貴州西北部から、隣接する雲南東北部にまたがる苗族地域には、今日もなお数多くの苗歌が残され、その一部について、上古の蚩尤と黄帝との戦いや、苗族の中原先住者としての歴史を反映するという評価がなされている。このような評価の基礎となるのは、苗語の原音をもとに歌詞を漢訳した訳語として現れるいくつかの語句、「格蚩爺老」「格蚩尤老」「革繆耶老」を蚩尤<sup>(36)</sup>、また苗族の上古の居住地の訳語「直米力」を黃河流域の河北平原<sup>(37)</sup>、苗族の祖先が渡ったとされる「渾水河」を黃河<sup>(38)</sup>とする解釈である。

今日伝わるこれらの苗歌の多くは、楊漢先の父である楊雅各など、石門坎の苗族信徒たちによって保存され、彼らとその子孫を介して残されたものである<sup>(39)</sup>。そして、一九四九年以後再び衰退した苗歌が、文化大革命後、歴史的史料として再評価されるにあたって、一つの契機を用意したのも、楊漢先が発表した論文であった<sup>(40)</sup>。今日の苗族社会に広く見られる蚩尤起源の苗族先住説や、それを支える苗歌の原型は、民国期の石門坎における「苗族復興運動」にさかのぼって検討されなければならないのである。

楊漢先は、一九四〇年当時、貴州威寧の苗族社会において「史歌」「故事歌」を含む、各種の苗歌と器楽・舞蹈が存

在していたことを記録し、また一九四二年の論文で、貴州の「大花苗」の苗歌について論じ、「蚩尤元老が力沐平原で戦い、泊水を渡り、南下した」情景をうたった「戦事歌」を紹介している。「大花苗」が石門坎に暮らす苗族「花苗」の俗称で、執筆者が楊漢先であることからすれば、これは石門坎に関する記述と考えるべきである。少なくとも一九四二年の石門坎に、民族英雄の一人を「蚩尤」に関連付ける苗歌が存在していたことは疑いない。

それでは、石門坎苗族の蚩尤を始祖とする歴史意識は一体いつ頃までさかのぼるのだろうか。これについて考える上で、注目すべきものは、教育の果たした役割である。石門坎では、一九〇八年から苗文訓練クラスが開講され、教師たちは苗文で教科書『苗族原始読本』を編集執筆したという。ポラード編纂の苗文識字教科書には、問答形式で以下の内容が、苗文で記されていた。

苗族とは何か。苗族は中国の古い民族である。中国とは何か。中国は世界で古い国家である。苗族はどこから来たのか。苗族は中国内地の黄河流域から来たのである。

具体的な編纂時期は明らかでないが、ポラードによつて編纂されたものであれば、清末民国初年と推察される。ポラードが参照したのは、キリスト教的「普遍史」でなければ、清末以来、漢族西來說と苗族先住説を基調として続いていた、同時代の中国内地の教科書であつたに違いない。石門坎では、辛亥革命後、国民政府の教育部指定の教科書が用いられていたからである。

ポラードの死後、石門坎の光華小学校に一九一六年に立てられた苗文の「石門坎苗族信教史碑」にも、

苗族は古来中国に生まれた中国人である。祖先たちは古詩に詳しく述べている。文化がなく文字も知らなかつたために、落ちぶれた存在に変わった後、各地を流浪し、落ち着くことがなく、誰も関心を持たなかつた。

とあり、中国の古族でありながら、流浪を余儀なくされ、辺境に打ち棄てられた存在となったとする民族史像が、石門坎の苗族社会に根を下ろしていたことがわかる。<sup>(30)</sup>

やがて一九三〇年代初めにこの地で布教を行なった宣教師は、花苗が、“Chi Yu”（蚩尤）を始祖としていたが漢族に敗れたとする、独自の伝承をもっていたことを記録している。<sup>(31)</sup>

以上から見ると、先の苗文起源の故事についても、石門坎における清末民国初年の宣教師たちによる近代教育の試みの中で苗族に受容された苗族先住説をもとに、一九二〇年代から三〇年代にかけての「苗族復興運動」の影響の下で、苗族自身によって民族文字とその伝統をめぐる歴史の土着化が行なわれた結果として評価すべきであろう。苗族による民族伝統再発見の過程で、蚩尤を始祖とする中原先住説が、文字の起源を説明するものとして織り込まれ、苗族が古い文明を持つことを示す証拠として、苗文そのものとともに、西南中国に広まったと推察されるのである。

#### (4) 民族意識の伝播と「苗族復興運動」

抗戦下の西南中国では、苗文の広域伝播があり、それによる識字率の向上があったことについては、先に見たとおりである。石門坎における以上のような動向も、また広域に影響が及んだ可能性を考えるべきである。

西南夷族の喻杰才が、国民政府軍事委員会の支持を得て、「戦幹団」の「夷苗」訓練生の募集のために、石門坎と同じく貴州西北部に位置する畢節専区を訪れたのは、石門坎で「苗族復興運動」が高まりを見せていた一九三九年のことであった。以後、それが一九四〇年の「大同盟」の結成、さらにそれに続く「辺宣団」へと発展していったことについては、すでに見たとおりである。「戦幹団」以来、高玉柱・喻杰才と連携し続けた金国光は、彼らの活動が、貴州

西北部においては苗族をも動員し、さらには苗族のキリスト教信徒たちの支持を取り付けたことについて明らかにしている。

私たちは印刷した「大同盟」決議の「四大方案」を大量に持ち、畢節から出発し、……〔貴州西北部〕水城畢放馬壩の楊拳昌（苗族）の家にたどり着いた。ここは苗族が集住する村で、多数の苗族はキリスト教を信仰していた。楊拳昌の族兄である楊拳林は教会の伝道師で、当地の苗族の中で威信が非常に高く、彼は国民党反動派の夷苗民族への差別・欺瞞・圧迫に対してひどく恨んでいた。私たちが彼に「大同盟」の宗旨を宣伝し、「持つていた」「四大方案」の一部を（自分たちに）代わって配布して欲しいと頼むと、非常に好意的にそれをやってくれた。彼はさらに教会の名義で一度、規模の大きな集会を開き、「夷苗民族は団結し、共に生存の権利を勝ち取ろう」「抗日救国に向かおう、国があつてはじめて家がある」などの宣伝を行なった。この会議に参加した苗族は、水城県下の地域のほか、さらに〔貴州西北部〕赫章・威寧・織金・郎岱（現六枝）などの県を含む、各地からやって来ており、二百人余りが「大同盟」に加入した。<sup>20</sup>

同時期の石門坎の苗族信徒たちが高揚させた民族意識は、布教のための苗文ネットワークとは別に、こうした経路によっても、民族・宗教の違いを越えて、西南各省に伝播していったと推察される。一九三九年に馬毅が「苗族復興運動」として警戒を呼びかけたのは、苗族伝統の復興であり、民族権益の主張であった。その実態は、以上見たように苗族固有の歴史意識を形成し、生存の権利を主張する、苗族による文化的政治的「民族運動」だったと考えられるのである。そして当時、それが広域に影響を及ぼしかねない状況が存在した。馬毅はそこに警鐘を鳴らしたのである。

## 十一、重慶政府と苗族先住説——抗戦下の民族論と民族政策

前章までにおいて、「抗日ナシヨナリズム」と複合した西南民族の民族意識の高まりと、「苗族復興運動」に注目して考察を試みた。それらのうち、「苗族復興運動」に関する情報については、馬毅という人物が一九三九年から一九四一年にかけて発表した論文において、政府と社会に警戒を呼びかける中に現れたものであった。こうした問題提起に対し、果たしていかなる反応があったのだろうか。苗族史論の行方に注目し、国内情勢、国際情勢、学術界の動向の三方面から、検討を試みていきたい。

### (1)馬毅の提起した諸問題

馬毅（曼青）は、黒龍江省籍で、北京大学法学院を卒業、抗戦下の雲南・四川疎開時には、昆明と重慶で顧頡剛と懇意にし、重慶では第二〜四届国民参政会参政員（黒龍江省代表）を歴任、一九四九年以後も大陸に残ったが、文化大革命中に迫害死された人物である。<sup>(2)</sup>

彼が発表した論文の中で、最も詳しく「苗族復興運動」に言及するのは、一九四一年六月に、歴史学者の顧頡剛と連名で政府に提出した議案である。当初「黃河流域に居住していた苗族を漢族が駆逐したという上古史の伝説を訂正し、それによって国族団結の障害を一扫する建議案」という題で、教育部第二屆边疆教育委員会第一次全体会議（一九四一年六月十二・十三日）に提出されたこの議案は、会議で注目点となったと見られる。「国族団結の障害に関わる

歴史上の伝説を訂正する建議案」と改題されて、改めて教育部蒙蔵司によって教育部史地教育委員会第二次全体会議（一九四一年七月四・五日）にかけられ、同会議において教育部提案の「歴史・地理学科の民族的立場を確定する案」の中に反映されたことが確認できるからである。<sup>(39)</sup> 教育部「歴史・地理学科の民族的立場を確定する案」には、以下のような記述が見える。

（一九一九年の）五・四運動から、（一九三七年の）七・七事件〔盧溝橋事件〕まで、民国十五（一九二六）年の北伐と民国二十（一九三一）年の九・一八事変〔滿洲事変〕を間にはさんで、わが国の文化界の趨勢は、すでに破壊から建設、「審問明辨〔問題を議論して真理を明らかにする〕」から「択善固執〔適切なものを選んでそれを確固たるものとする〕」、中国と西洋の融合から新たな〔中国〕本位の文化の樹立へと向かう趨勢にある。過去の支離滅裂な学風は、直接的間接的に帝國主義の麻醉の毒素に感染しており、すみやかにこの機を借りて、正すべきである。近ごろ于右任〔監察院〕院長が、「インドシナ半島」という旧来の名称を「中南半島」に改めることを主張し、また教育部〔第二屆〕辺疆教育〔委員〕会第二（二）次全体会議が、今後わが国の歴史教科書には華族〔漢族〕が苗族を駆逐したという根拠のない伝説を二度と踏襲させないと議決したのは、ともに方向を同じくする優れた措置である。改革を広く進め、新たな基礎を打ち立て、今後の中国国民の学習する歴史・地理の学科を、科学としての真理と民族としての要請をあわせ持つ学科にし、白鳥庫吉・勒郷得〔？〕たちが意図的に作り出した「堯舜禹抹殺論」や「中国人は白人と黒人の混血人種である」などの妄言を永遠に根絶し、それによって〔民族としての〕自信を強め、団結を強固にすべきである（教育部「確定史地学科民族立場案」一九四一年七月）。<sup>(40)</sup>

これは、五・四運動以来、中国文化界が固有の文化伝統に対する見直しを進め、学术界が伝統的歴史像を打ち壊し

て新たな歴史像を作り出してきたことを批判し、中国本位文化の建設へと向かう中での歴史・地理教育の役割を強調したものである。清末以来の学術界の動向に支離滅裂で帝国主義に汚染されているものがあるとしてそれを批判し、一方で于右任による「中南半島」への改称提案とともに、苗族先住説にかかわる先の馬毅・顧頡剛の議案を、好ましい傾向の現われと評価する。そしてこの趣旨を踏まえ、同会議では、顧頡剛を含む委員・専門家が推薦決定され、歴史・地理学科の民族的立場について注意すべき点」を報告させるよう、決定されたのである。

この教育部による議案の前提となった馬毅・顧頡剛の主張の背景には、前章で見たように、苗族先住説に立つ「苗族復興運動」への警戒があった。馬毅・顧頡剛の議案の内容を、前章で引用した「苗族復興運動」に関する記述を加えて示すと、以下のとおりである。

某省某区（機密）ではかつて大規模な苗族復興運動があり、その中心となっていたのはいずれも国内外の専科以上の学校の学生（名は機密）で、「苗」民族が五千年前には中国の主人で、黄河流域に居住していたが、漢族に駆逐されて、ついに衰微した」と強調し、そのため苗語・苗文を一律使用し、苗書（実のところ「苗族は」無文字である）を読み、苗族の服装を着て、漢族との通婚を禁止するよう宣伝し、さらに代表を各省に派遣して宣伝し、それによって故地の回復と苗族の復興を目指している。

またシャム（現タイ）は雲南・貴州をタイ族の故地と称し、タイと（国号を）改めた後、すぐに日本が侵略して操り、種族問題を利用して、種々の策謀を妄りになしている。

ゆえに辺境同胞（非漢族）が団結する上での障害を消し去り、（彼らを）扇動し騙す口実をなくすことを望む。漢族が苗族を駆逐したという荒唐な伝説は必ず訂正すべきであり、さもないと辺境教育が普及し辺境民族の程度

が高くなればなるほど、種族間の恨みはかえつて深まり、情感を融合させ国族を団結させるという計画とは、まったく正反對の結果となる。

措置の第一として、教育部は新たに各レベルの学校の歴史教科書の改訂を行い、最新の甲骨〔文字〕・土器の研究結果にもとづいて、漢族は黃河流域の土着であり、いかなる民族も駆逐や圧迫をしていないことを証明する。章太炎〔炳麟〕の「排滿平議」、呂思勉の『中國民族史』、および顧頡剛が『益世報副刊』「辺疆」に発表した文章〔「編者按」〕によって、いにしえの三苗が今の苗族同胞ではないと証明する。この種の伝説がひとたび改定されれば、民族間に想定される人為的な恨みは、発生しない。その上で辺境教育を推し進めれば、相反する作用はほとんど発生することなく、また教育部が〔『訓育綱要』で〕規定する、「国族精神を發揚」「民族融合の歴史を注意して解説」という目的とも合致する（馬毅・顧頡剛「建議訂正上古歴史漢族駆逐苗族居住黃河流域之伝説以掃除国族団結之障礙案」一九四一年六月）<sup>(註)</sup>。

筆頭で「苗族復興運動」への警戒が説かれ、以下に歴史教育についての議論が展開されているように、問題の核心が苗族先住説にあったことは明白である。苗族史論は、ついに政策に影響するまでになったのである。

ここで述べられている各論点は、いずれも馬毅が一九三九年に、昆明で発表した二つの論文の中に、さかのぼって確認される。その一つ、馬毅『中華民族は一つ』の信念を強くしよう<sup>(註)</sup>の内容を、前章で引用した「苗族復興運動」に関する記述を加えて示すと、以下のとおりである。

日本は「民族自決」の名を借りて偽滿洲国をつくり、我々の東三省を呑み込んだ。日本はさらに偽大元国（蒙疆自治政府？）をつくり、トルコ・インドでは一部の者と連携して、偽回回国をつくらうとしており（イギリス

の『アジア雑誌（？）』五月号）、シャムでは雲南・広西は揮（シヤン）族の故地であると宣伝して、彼らに失地を回復するよう鼓舞扇動している。「内陸の香港」の××<sup>（ハム）</sup>地方では、苗族同胞たちがだまされ挑発されて、「苗族は中国の主人で、歴史的に五六千年前には黄河流域に居住し、西から来た漢民族に駆逐された」と強調している。そのため彼らは苗族復興運動を醸成させ、苗語と苗文（苗族文字）を一律使用し、苗書（苗文で書かれた書籍）を読み、苗人の服装を着て、漢人との通婚を禁止するように宣伝している。これは我々の民族団結の根を食い荒らす害悪である。

我々はさらに史書と伝説の誤りを正し、敵が離間に利用する口実を消滅させなければならぬ。漢族が西来し、黄帝が蚩尤と戦って勝ち、苗族を駆逐して黄河流域を占拠したという史書の一つの荒唐無稽な故事は、両民族に暗い影を落としているが、実際には太古の伝説は年代がはっきりせず、もともと信じがたい。……漢族が中国北部の土着であることは、今日、甲骨・陶器の発見と科学的研究によってすでに証明されている。最近「北京（原人）」の骨が発見され、協和医学校教授のブラック [Davidson Black] の研究によれば、現代の華北人の形質と同じ一派に属すると言い、五千年前の黄河流域がすでに漢族の繁殖地域であったことを知ることができる。……みながすべて土着民族であり、漢族は苗族同胞の土地を侵略したことはない。……苗（族）と漢（族）の間に仮想された歴史的恨みは、自ずと研究によって跡形なく消え去るのである。

漢族と自ら呼ぶのは驕りではなく、苗獠と呼ぶのも軽蔑ではない。……四裔（四方の異民族）の名称が虫偏や犬偏をもつのも、軽蔑の意味はない。……いにしえの三苗は、今の苗族ではない。（例えば）……（章太炎（炳麟）「排滿平議」）……（呂思勉『中国民族史』）、これら（章炳麟・呂思勉）の貴重な見解（苗族非三苗起源説）は、

民族間の不当な溝を取り去るには実に十分なものである。惜しむべきことに近ごろでは、歴史を研究する者の中に、不勉強にも古い歴史書を踏襲したり、群説を広く採用するのを好み、博学を自慢する者がいて、まだ正しくこれらの見解を採用することができておらず、民族団結に誤りを残して、影響は非常に大きい。これは誤りであり、即刻正すべきである（馬毅「堅強『中華民族是一個』的信念」一九三九年五月）。

ここでの馬毅の主張が、二年後に顧頡剛と連名で提出した先の議案のそれと、基本的に一致することが見て取れよう。以上から、一九四一年の提案は、馬毅の一九三九年における思考をそのまま反映するものであり、その内容には一九三九年の歴史的條件が反映されていると見るべきなのである。

## (2) 一九三九年の国内情勢と西南民族

それではここで、一九三九年の国内情勢について、検討してみることしよう。すでに見たように、一九三八年十月、武漢が陥落したことで、西南各省を拠点とする長期戦が現実化する。そして一九三九年に入ると、劉文輝を主席とする西康省政府が正式に成立、それを牽制する「軍事委員会委員長西昌行轅」が置かれ、重慶政府から離脱した汪兆銘の命運も決し、雲南省政府主席の龍雲も重慶政府への支持を表明して、西南中国における権力の分立構造が確定した。こうした状況の中で、抗戦を支える基礎として、西南中国と西南民族が、重慶政府によって重視され始めるのである。

その影響は、教育政策において顕著に現れた。まず、一九三九年一月に重慶で開かれた国民党の第五届中央執行委員会第五次全体会議（五中全会）では、従来の蒙・回・蔵を対象とした辺疆教育をあり方を修正し、「西南苗胞」「苗

民」の教育を重視するという教育報告案が議決されている。またこの頃に中華民国教育部が制定した「訓育綱要」にも、辺疆教育に關連して、「國族精神を發揚し、地方意識や偏狭な民族意識が生み出す懸隔を取り除く」「民族の融合の歴史、および辺疆と内地との間の地理・經濟ほかの面での密接な關係を注意して解説し、国内全体の民族の意志と力を結集する必要性を明らかにする」ことが明記された。<sup>(28)</sup>

さらに、一九三九年三月に重慶で教育部が開いた第三次全國教育會議でも、「民族團結の危害となる名詞の濫用を禁止することに関する案」が議決され、また「蒙回藏苗夷などの民族學校を広く設け、あわせて各民族の語文の教科書を編集印刷し、それによって各民族固有の文化を發展させ、各民族の政治經濟文化的地位を向上させ、抗戦下の民族團結を確保する案」と、「教科書およびその他の刊行物の中で中華民族の團結精神を妨げる語句を取り締まり、「漢族との」親愛と相互扶助を促進する案」が、教育部が参考とすべき議案として議決されている。<sup>(29)</sup>

以上はいずれも、一九三九年前半における、重慶政府の西南民族重視の姿勢を反映する。そしてまたこれらの方向性は、先に見た、同時期の馬毅「『中華民族は一つ』の信念を強くしよう」の趣旨とも一致するものである。「苗族復興運動」を警戒し、苗族先住説を是正しなければならないという馬毅の主張は、当時の重慶政府の政策と結び付いていたのである。<sup>(30)</sup>

加えて、馬毅が文中で言及した民族呼称の問題もまた、当時の民族政策を踏まえたものとして理解される。

伝統的華夷思想に立った旧来の民族呼称については、すでに一九三〇年の段階で、楊成志による民族調査報告書や『新亜細亞』誌上で、その見直しを訴える声が現れていた。<sup>(31)</sup>その後、政府による施策の中で「特殊部族」「土著民族」などの総称も考案されたが、全国の個別の民族呼称を、根本的に変えようとするものではなかった。<sup>(32)</sup>

重慶政府が民族呼称の問題に本格的に取り組み始めるのは、一九三九年のことである。同年一月、国民党中央執行委員会社会部は、中国大衆文化社からの申し入れを受け、西南民族呼称の「猓」偏を持つ呼称をどのように改めるべきであるかについて検討するよう、国立アカデミーである中央研究院に委嘱した<sup>(38)</sup>。一方、教育部は、民族団結の危害となる名詞（「中華民族の団結精神を妨げる語句」）の濫用を禁じるという、上述の第三次全国教育會議の決議を受けて、全国的に「苗夷蛮獠猓、および少数民族などの名称」の濫用を禁じるように中央に求め、重慶政府は、同年八月、全国に対し、旧来の民族呼称を禁じ、それぞれが暮らす土地の名称によって、蒙古人、西藏人、某省辺地あるいは某省辺界の人と呼ぶよう通達した<sup>(39)</sup>。これが政策として一定の実効性を持ったことは、同年九月に、広西省政府主席の黄旭初が、重慶政府の訓令を受けて、「以後、苗・夷・蛮・獠・猓および少数民族などの名称について、濫用を禁止する」という通告を發布していることからうかがえる<sup>(40)</sup>。

このように、一九三九年には、民族間の対立意識を融和する目的で、政策としての民族名称の変更が、複数の方向から試みられている。同年五月に発表された『中華民族は一つ』の信念を強くしよう<sup>(41)</sup>で馬毅が民族名称を問題としている背景にも、当時のこうした政策があったと推測されるのである。

### (3) 一九三九年の国際情勢と苗族先住説

先の馬毅の論文では、苗族史論の問題がタイ（シヤム）をめぐる国際情勢と関連付けて論じられている。この時期に苗族史論が注目された背景には、前節で論じた国内要因だけではなく、重慶政府を取り巻く国際環境があったのである。一九三九年、シヤム（Siam）はタイ（Thailand）へと国名を変更する。重慶政府は、そこに大タイ主義（汎タ

イ主義、タイ拡張主義)の氣運を見て取った。そしてそれが、西南中国に暮らすタイ系諸族などの非漢族に波及することを警戒したのである。

前近代においては中国王朝からの冊封を受け、朝貢關係を維持し続けてきたインドシナ諸国は、十九世紀に列強の影響力が強まる中で、清朝を中心とした華夷秩序から、相次いで離脱していった。シヤム(暹羅、現タイ)は、インドシナ諸国において唯一植民地化を免れた国であるが、華夷秩序から離脱した後、清朝との間に近代的外交關係は結ばれず、また辛亥革命後も、中華民國との間に正式な外交關係は存在しなかった。両国の間に初めて友好条約が締結されたのは、一九四六年一月のことである。<sup>(38)</sup>

一方で、南洋華僑の名で知られるように、東南アジアには華僑社会が各地に形成され、シヤムはその中心地の一つであり、シヤムと中国本国との間には、華僑を通じた各種ネットワークが存在した。中国知識人もまた、シヤムに対して、日本や朝鮮・ベトナムとは若干異なる意識があったと見られる。

例えば、章炳麟は一九〇七年に、革命によって樹立すべき国家の青写真として、漢代の版図(実効支配域)を基準にするという前提に立ち、朝鮮・ベトナム(およびカンボジア)を回復すべき「二郡」、ビルマをその次に回復すべき「一司」として位置付け、蒙古・回部(現新疆)・西藏(現チベット)の地域は「三荒服」としてそれぞれに去就をまかせるといふ腹案を示している。<sup>(39)</sup> すなわち、歴史的には中国王朝の冊封の内にあつたシヤムだが、章炳麟はその国や民族を、回復されるべき国土や、同化一体となり得る血統の内には位置付けず、むしろ排除されるべき満洲や外国である日本と同列視していたのである。

一方、孫文は一九二四年に發表した文章の中で、その十余年前にシヤム外交部の外交次長が「もしも将来中国がよ

く革命を成就し、富国強民と変じたならば、わが暹羅もまた中国に復帰し、中国の一行省となりたきもの」と語つたと、中国の王道思想の優越性を示す例として得意気に述べている。<sup>(30)</sup> 中国知識人としてシヤムは、明らかな外国ではあるが合流することも期待されるという存在だったのである。

それが、馬毅の提言が始まった一九三九年になり、どうして脅威を感じさせるに至つたのだろうか。当時の状況を明らかにする史料として、以下のものがある。

駐暹羅（シヤム）商務委員会の陳守明による「中国外交部に対する」報告には、以下のようにあります。

シヤム首相のルアン・ピブーンは、本（一九三九）年六月二四日に、シヤム国を「タイ（泰）国」（Thailand）、シヤム人を「タイ（泰）人」（Thai）と改称することを正式に宣言しました。……同院長はまたこの日の夜にラジオ演説をし、その中で「タイ人の経済状況は、農業と商業の実権が外国人（華僑）の手に落ちたことで、シヤム（タイ）人は飢え死にさせられようとしている。今、タイ人は商業による救国をなし、今日から、外国人との競争にあたり、タイ人たる者は、優先的にタイ人の（生産）物を買うべきだ」と述べ、また「ごく一部の新聞だけが中国人のわが国での度を越えた愛国行動を攻撃する。私は外国人の経営する外国の新聞（華字新聞）に、タイ人が（タイ）政府を攻撃しているという記事があるのを目にした」と言い、続けて、「古代の『タイ族』は中国の中部にいたが漢族に駆逐されて追い出された。かつてタイ人は強い愛国心を持っていたが、後に他族と血統が混ざり、タイの血が次第に薄められて弱まり、ついには愛国心の鼓舞が少なからず困難となつた。英明な君主である（ラーマ）六世は、かつて『タイ族よ目覚めよ』などの詩を詠んで、タイ人の覚醒を促した。私は今日、タイ族同胞にあえて要請する。心から国を愛し、文明ある民族となり、その上で、混種（中国系タ

イ人?)や、直接あるいは間接的に身心および言語によってわが民族(の団結)を破壊しようとする者など、愛国意識に害をなす各種の者を、共同で排除するのだ」などと述べました。「陳守明が」考えますに、ピブーンの演説は夜郎自大を誇張するもので、その反中国的態度は、以前と比べてとくに顕著です。<sup>(20)</sup>

これは、国立アカデミーである中央研究院の総辦事処(重慶)が、一九三九年七月二二日に歴史語言研究所(昆明)に宛てた文書の中の引用文として見える、中華民国外交部(重慶)から総辦事処に七月二一日付けで送られた文書の一節である。外交部は、これに先立って、シヤム華僑の駐暹羅商務委員会陳守明からの報告で、タイへの国号変更が、華僑の排撃だけでなく、大タイ主義的民族史観を伴った、政府主導の政治運動の一環であることを知ったのである。上文には、さらに以下の内容が続いている。

〔外交部が〕考えますにシヤム在住の華僑は数が多く、シヤム民族と歴史的血統的に深く関わるだけでなく、経済的にも地位を占め、それでシヤム人から忌視されているのです。シヤムが改称に向かおうとしていた当初(これ以前に)、本部〔外務部〕が電報で受けた当該商務委員〔陳守明〕の報告には、以下のようにありました。

シヤム芸術局長のルアン・ウィチットは、本(一九三九)年四月十一(十二)日にルアン・ピブーンの緊急命令を受け、飛行機で(仏領インドシナの)ハノイに行き、博物院(フランス極東学院)に少なからずのタイ族の歴史にかかわる古物があることを発見し、さらに「タイ族の中国における確かな出生地あるいは原住地、および現在タイ族が中国に散居する地域を示す説明図があつた」と述べました。ルアン・ウィチットは、シヤムに戻る五月二五日にラジオ演説することを求め、演説でアメリカ人ドッド博士 Dr. (William Clifton)

Dodd の著した *The Tai Race* [.: *Elder Brother of the Chinese, Cedar Rapids Iowa: The Torch Press, 1923*]

から、タイ族でわが国（中国）に散居する者が、広西で約八〇〇万人、貴州で約四〇〇万人、雲南で約六〇〇万人、広東で約七〇〇万人、四川で約五〇〇万人、広東の海南島で約三〇〇万人、中国西南各省だけで、タイ族は総計一九五〇万人で、それ以外の仏領安南で約二〇〇万人、英領ビルマで約二〇〇万人、シヤムの一三〇〇万人と合わせると、タイ族は総計三六五〇万人で、もし改めて調査すれば、その数はこれだけにとどまらないはずであるという記載を引用しました。「ウィチットは」さらに、「タイ族の人々は各地に散居しているが、今に至るまでなおタイ語を話し、タイ文字を習い、その着るところの衣服は、タイ族の青色を好み、ドッド博士が中国のタイ族の人々が散居する地域で布教していた時には、当地のタイ人がなおも独立していると自認し、漢字を学ぼうとせず、かつ博士にタイ文字を教えるように求めるものがあった。本年〔?〕アメリカ Syracuse 大学の George B. Cressey 教授が中国に行つて調査をした後に著したものは『China's Geographic Foundations: A Survey of the Land and its People, New York: McGraw-Hill, 1934』内容も、また多くがドッド博士の説と相同で、さらにタイ族は女性が纏足しておらず、かつ華人を嫌つていて、「地図の中には」独立を示す自立の標示をもつものもあると指摘する。だから自分はこの演説で、タイ人に自己の独立自由、相互協力を促して、国家の繁栄を高めるのである」などと述べました。

〔以上、陳守明が報告してきた〕今回のシヤムの改称は、ただ華僑のシヤムにおける地位に大きな影響があるだけではなく、同時にわが西南辺境の一部の苗族〔非漢族〕を切り離し、わが辺境地域を侵蝕しようとする意図があります。明らかに日本人が内側から挑発したもので、国際的な陰謀をはらんでいます。思うに日本は今シヤム人を利用して我々に困難な状況を作り出しており、将来はさらに日本が南進政策を実行する時に〔シヤムを〕イ

ギリスとフランスを牽制する道具にするはずで、それならば、シャムがいうところのタイ族は、その来歴、および中国との関係はどのようなものであるのか、詳細に研究して、対応に役立てるべきです。「外交部は」ここに貴研究院に特に書簡を送り、研究して下さるようお願いする次第です。<sup>(30)</sup>

これにより、一九三九年六月の国号変更に先立ち、首相ルアン・ピブーンの意向を受けた芸術局長ルアン・ウィットトによって、大タイ主義に立つ行動がすでになされておられ、それが陳守明によって、いち早く重慶政府に報告されていたことがわかる。

シャムでは、一九三二年の人民党クーデター（立憲革命）により、専制君主制から立憲君主制への移行が試みられたが、政変が絶えなかった。ピブーンの名前で知られるピブソンクラム（[Luang] Plaek Phibunsongkhram [Phibunsongram]）は、タイ人父母の間に生まれ、軍人として頭角をあらわし、国防相を経て、一九三八年十二月に首相に就任、在任中、各種のタイ化政策を進め、また日本とも接近を図った人物である。一方のルアン・ウィットトの名で知られるルアン・ウィットトワータカン（Luang Wichitvathakan [Wichit Vathakan]）は、本名が金亮で、華僑の子として中部タイに生まれ、ピブーン内閣成立に先立って、パホン（Phahon）内閣で無任所大臣兼芸術局長を務め、ピブーン内閣でも閣僚を務めた。<sup>(31)</sup> 彼は「民族主義的歴史叙述を強力に推進した人物で、多くの歴史小説を残した人物であり、歴史劇の名高い劇作者であると同時に、よく知られた軍国歌謡の作詞者で」、それらの創作に際しては、「タイ民族の起源、タイ諸王国の樹立、独立を目指す闘争、外的との戦い、タイ国民の統一」<sup>(32)</sup>をテーマとして好んで用いたとされる。

立憲革命後のシャムでは、国民統合の軸となるイデオロギーの一般社会への普及が、政府によって試みられ、「チャー

ト」(cha)、「すなわちネイション(nation)としての国民意識の形成が進んだ。まずパホン内閣の下では、国歌(チャートの歌)の制定、国旗(チャートの旗)掲揚の推進、記念碑の建立など、チャート重視の一連の政策がなされ、対華僑の言論としても、ルアン・ウィチットが、同内閣の閣僚であった一九三八年七月に、チュラーロンコーン大学で、中国人をユダヤ人と比較して経済面の害悪と訴える講演を行なっている<sup>(36)</sup>。一九三八年十二月に成立したピブーン内閣は、翌一九三九年以後、この路線を踏襲し、そしてそれを急進化させていった。その根幹となったのが極端なタイ化(国民化)政策と大タイ主義の思想であった。

タイ化政策としては、革命七周年を機に、六月二四日が「チャートの日」(national day)と定められ、この日、ラジオ演説したピブーンは、「文明人のエチケツト」として、また「民族のよき慣習としてタイ人の子孫の行動基準」となる「ラッタニヨム」(Rattaniyom・愛国信条)を制定することを公表した<sup>(37)</sup>。そして同日、ラッタニヨム第一号として国家・民族・国籍の名称をシャムからタイに一律変更することを命じ、以後、ピブーン内閣は、国内すべての民族を地域・系統を問わず一律タイと呼ぶこと(第三号)、国旗・国家を尊重すること(第四号)、タイ国産品を消費すること(第五号)、タイ語を尊重し誇りを持つこと(第九号)など、一連のラッタニヨムを次々と公布していったのである<sup>(38)</sup>。

一方、ピブーン政権の大タイ主義の思想は、先の史料にも述べられているルアン・ウィチットによる、シャムの隣国、仏領インドシナ(仏印)視察に象徴的に現れている。視察先のハノイ(Hanoi)で記録された内容によれば、ルワン・ウィチットは、一九三九年四月十二日にハノイに到着、当時仏印の考古・歴史・民族学の最高学術機関であったフランス極東学院(Ecole Française d'Extrême-Orient)を訪れ、その後、ハノイの史跡を見学し、中国国境のランソン(Lang Son) <sup>(39)</sup>北下して中部ベトナムの古都フエ(Hue)で阮朝皇帝のバオダイ(Bao Dai)帝に

謁見し、クイニョン (Qui Nhon)・ニャチャン (Nha Trang) 及びチャム (Cham) 文化のミーソン (Mi Son) 遺跡・ポーナガル (Po Nagar) 遺跡を見学、フノンペン (Phnom Penh) に移動し、シエムリアップ (Siem Reap) でアンコール (Angkor) 遺跡を見学予定であったが、四月二十七日に急遽帰国したという<sup>(38)</sup>。アンコール遺跡のシエムリアップ地域は、かつてシャムがフランスに割譲させられた地域である。陳守明の報告に言うように、この一連の旅がピブーンの指示によるものであり、しかもルアン・ウィチット本人がこの視察成果を「タイ族の歴史」と関連付けて語ったとすれば、その行動については、将来の失地回復の遠謀の下に、タイ王朝史の枠組みを越えて、インドシナ半島の広域を自民族の歴史空間、もしくはその延長として見なす発想によってなされたものであったと考えざるを得ない。

十九世紀末以来、シャムにおいては、周辺諸国に対する失地回復の思いが一貫して存在し、そしておもな関心は仏印に向けられていた<sup>(39)</sup>。タイ政府の失地回復を目指す動きは、一九三九年九月、欧州での第二次世界大戦の開戦を経て、一九四〇年九月の日本による北部仏印進駐により、インドシナにおけるフランスの影響力が後退する中で顕在化した。一九四〇年十一月以後、タイと仏印は国境線をはさんで交戦するに至る。これに前後して、ピブーン政権は、インドシナ北部のフランスに奪われた地域 (シブソンチャウタイ) から、ラオス、カンボジアにまたがる地域の全土着民を「タイ族」と見なして無条件にタイ国籍を与える政策を一方的に発表し、またラジオ演説で、ピブーンはそれらが皆「タイ人」であると明言、ルアン・ウィチットはタイとクメールが「同一種族」であると主張した。この時期の反仏宣伝では、ベトナム人を含めたインドシナ諸族を総称する「レームトーン (黄金半島) 人」なる概念が多用されたという<sup>(40)</sup>。

以上から考えると、一九三九年四月のルアン・ウィチットの行動は、この「レームトーン人」論を形成するための過程であり、またその露払い的な、文字通り「聖地巡礼」の旅であったと言える。中国外交部は、こうしたタイの国内的、対外的政策の変化を、先の史料に見るように、中国の領土保全と「国族」団結を揺るがす、対外的な野心の現われとして評価したのである。

しかし、ラッタニヨムの内容が示すとおり、一九三九年以後のピブーンによる一連の政策は、基本的には国内政策であり、それは第一義的にタイ族中心の国民化政策であった。また、ルアン・ウィチットによる言及を先の引用文が報告しているように、これ先立つ時期、すでにワチラーウット（Wiravudh）王（ラーマ六世）の下でも、民族主義的政策が展開されていた<sup>(86)</sup>。さらに、ピブーンらの大タイ主義思想については、上述の「レームトーン人」論から仏印に向けられたものであったことは明らかだが、最初から南中国までを視野に入れていたとは考えがたいところがある<sup>(87)</sup>。また、中国側が敏感な反応を示したタイ族の中国南部起源説についても、それは十九世紀末におけるラクペリーの主張を継承した<sup>(88)</sup>、苗族先住説の発展型に他ならない。シャム国内では、十九世紀末以後、チュラーロンコーン（Chulalongkorn）王（ラーマ五世）の弟ダムロン（Damrong Rachanuphap）親王を中心に国史の構築が推進された。この民族史論はその過程でシャムの公定史の中に組み込まれ<sup>(89)</sup>、以後そのまま続いてきたものなのである。そして中国国内でも、シャム人が自民族の故地を中国南部に求める主張を持つことについては、これ以前の時期からすでに知られた事実であった<sup>(90)</sup>。

つまり、ピブーン政権の国民化政策や、それが掲げる大タイ主義の思想、タイ族南下史観自体は、一九三九年以前から脈々と続いてきたものであり、また必ずしも中国が主目標ではなかったのである。したがって、一九三九年に中

国内でタイの情勢が問題視されたのは、その政策やイデオロギーの内容よりも、それが現れた時代背景に理由があったと考えられる。

外交部が先の文書で指摘しているように、当時のタイの一連の動向の背後には、日本の存在があると信じられていた。重慶政府は、日本の南進政策の下でタイが日本と接近し、それが各種の政策やイデオロギーを生み出す要因となっていると疑っていたのである。その中には汪兆銘をめぐる問題も含まれる。華南出身者が中心であるシャム／タイの華僑社会では、これ以前から、胡漢民ら西南派などの反蒋介石派との結び付きが存在し、一九三八年十二月に汪兆銘が重慶政府を離脱した後も、汪兆銘派の組織がシャムの華僑社会に形成され、影響力を持つに至っていた。これに対して、蒋介石は外交関係のないシャムに半公式の代表機関として駐暹羅商務委員辦公処を設け、潮州華僑の有力者である陳守明 (Tan Siew Meng) を、一九三二年にその代表である駐暹羅商務委員に任命していたのである。陳守明は、汪兆銘派の形成が進むシャム華僑社会における、重慶政府とのパイプ役だった。汪兆銘の帰趨が定まった一九三九年前半に、陳守明からの報告を受けた重慶政府外交部が、タイ政府の政策と国内情勢を注視したことについては、このような背景の中で理解する必要がある。

以上からすると、上述した重慶政府による苗族史論への関心と西南民族重視の政策は、一九三九年における日本の汪兆銘工作と南進政策が、タイ情勢の変化を通じて生み出したものと言える。先の馬毅の論文、『中華民族は一つ』の信念を強くしよう(一九三九年五月)が、日本への強い敵愾心を軸に、「苗族復興運動」とタイの国内情勢への警戒を煽り、歴史教育の不備を正し、民族呼称の問題を提起しているのは、これを象徴的に示している。

またこの時期、すでに論じたように、西南中国においては、各地の民族が自民族の権益を求め、団結と連携を図り

ながら盛んに政治活動を展開し、伝統文化の復興を進めていた。これがもう一方で、重慶政府による苗族史論への関心と、西南民族重視の政策を強化させる背景となったと考えられるのである。

南中国とタイにまたがる地域は、以上のような国内外の情勢の下、この時期、「国族」と「チャート」構築を背景とした、重慶政府とタイ政府による歴史的時空間争奪の舞台となった。<sup>(10)</sup> タイにおけるタイ化政策の内容は、同時期の中国国内で蒋介石の主導で展開されていた「新生活運動」と酷似する。そしてまた、タイにおけるタイ族中心の同化政策についても、新生活運動が西南中国では非漢族に対する漢化(同化)政策としての側面を持ったことが想起される。<sup>(11)</sup> 国境地域をはさんだ同時並行的な展開が、官(外交部)民(馬毅)ともに、西南中国の非漢族の実態と苗族史論に対する関心を導いたのである。<sup>(12)</sup>

#### (4) 一九三九年の学术界と馬毅論文——昆明の傅斯年と顧頡剛

以上では、馬毅の論文『中華民族は一つ』の信念を強くしよう<sup>(13)</sup>を出発点として、一九三九年以後の苗族史論の位相を、重慶政府の民族政策と国際環境の両面から考察した。以下では、その発信源となった一九三九年の昆明学术界に光を当てて考察を試みたい。

タイの国内情勢が報道される中で、中国知識人の間では、タイの国名変更を注視する論文が相次いで発表され、<sup>(14)</sup> 両国間の関係は緊張を強めた。<sup>(15)</sup> 一方、日本の南進政策の下で、「民族史」が引き裂かれる懸念は、タイだけではなく、仏領インドシナからも生じ、その方面でも歴史を繋ぎとめようとする動きが顕在化した。<sup>(16)</sup> 一九三〇年前後の中国東北部に似た状況が、<sup>(17)</sup> 十年を経て、南中国に再現しつつあったのである。<sup>(18)</sup>

雲南省省都の昆明は、この時期、戦火を避けて疎開した人々で賑わいを見せていた。<sup>(48)</sup> その中には中国各地から集まった知識人たちも含まれ、彼らが教鞭をとり、研究の場とする各種の機関も、この地で再建が試みられていた。その昆明で、中国民族論をめぐる論争が、一九三九年に巻き起こるのである。<sup>(49)</sup> 馬毅の議論は、この論争の一部を構成したものであった。

ここで改めて馬毅『中華民族は一つ』の信念を強くしよう」の内容を確認しておこう。先に引用した部分に続いて、当時の昆明の学術界の状況を反映する、以下の記述が認められる。

歴史学者は、これらの事実と陰謀を完全に無視し、国族の存亡が危ういことに気付かず、なおも象牙の塔の中にこもり、自分の考えで自分のために歴史学を研究している。歴史の任務はもともと民族教育の手段であり、歴史を教えるには特殊な目的があるのであって、それゆえに国を滅ぼすと最初にその歴史を燃やし禁じ、書き改めるのである。歴史は、それを著すのは、事実を深く明らかにし民族主義を宣揚することにある。ところが中国の学者の多くはみな奇説を誇り異説を立て、いにしえを疑って今を乱し、博学を自慢して、学問を研究する目的を忘れている。このような態度はいけない。

もし歴史的な「認識の」誤りをこのまま続ければ、知識の浅薄さを示すだけでなく、事実と食い違いを生じさせ、歴史を研究する意義に背くことになる。こうした誤った伝統を続けることは、帝国主義のかわりに我々の民族史を修正し歪曲するに等しく、自分たちの統一抗戦の親密さを攪乱して彼らの侵略を利することは、文化的漢奸「民族の裏切り者」となることと変わりがない。我々はただちに、誤解によって従前の誤った民族観念を伝えるという桎梏から離れ、この光り輝く燦爛たる五千年の歴史のなかで、親しみあい団結し自然と混ざり合った、

世界で最も偉大な中華民族を発揚すべきである。歴史上の荒唐無稽な故事伝説を捨て去り、「我々を」騙し誘惑しようとする帝国主義の詭計陰謀を否定し、革新することによつてはじめて、正しく全国民を結集し、日本の侵略者のならず者たちの挑発に対するこちらの返答を示すことができる。「中華民族は一つ」の信念を強くし、我々の抗戦建国、神聖なる民族の解放闘争の輝ける前途に向かつて邁進しよう（馬毅「堅強「中華民族は一個」的信念」一九三九年五月七日）。

疎開により、昆明で発刊されるようになった日刊紙、『益世報（昆明）』の一九三九年五月七日に掲載されたこの論文は、奇説を競い合つて帝国主義を利用する「歴史学者」の行動を厳しく批判し、「中華民族は一つ」の信念を強くするよう呼びかける。第一節で紹介した本論文の前段部分の内容を踏まえるなら、ここで馬毅が奇説として批判するのが、漢族西來說や苗族先住説に立つ、先住民史観につながる諸学説であることは疑いない。馬毅論文の前段部分において、章炳麟や呂思勉が清末・民国初年に早々に批判し、別の解釈を提出しているにもかかわらず、それを無視した一部の学者が旧説を踏襲し、社会に流布させていることに対して批判がなされているからである。先に考察したように、章炳麟の学説とは、漢族の西来と苗族の中原先住を否定し、今日の苗族を先秦時代の髦（髻）が四川方面から移動してきたとするものであり、呂思勉の学説とは、三苗を民族名ではなく国名とし、三苗の酋長である蚩尤を、今日の苗族とは無関係であると結論付けたものであった。馬毅は、この二人の学説を再評価することによつて、漢族と苗族の対立を前提とした苗族史論を根絶するように訴えたのである。

馬毅の論文が発表された頃、昆明の郊外では、中央研究院歴史語言研究所の凌純声が、一九三三年に湘西で行なった苗族調査の報告書刊行に向け、芮逸夫を助手として、最終作業を進めつつあった。歴史語言研究所は、首都南京か

ら湖南省長沙を経て昆明に疎開したが、市内の空襲を避け、一九三八年十月から昆明北郊十一キロの龍泉鎮棕皮營を拠点とするようになっていたのである。<sup>(4)</sup> 凌純声は、一九三八年の春に研究所とともに昆明に到着すると、報告書の執筆に取り掛かり、その年の末までには初稿を完成させていた。そして一九三九年春から夏にかけて研究所の蔵書が届き始めると、それを使って校正を始め、一九四〇年春には完成原稿を書き終え、所長傅斯年の査読を経て、同年四月、研究室が置かれた龍泉鎮宝台山上で、序文を擲筆したのである。<sup>(5)</sup> 彼がまとめた報告書において、今日の苗族が、三苗・蚩尤とは無関係で、四川方面から後世に移住してきた髦（髻）の末裔であるという苗族史論が展開されたことは、先に論じたとおりである。<sup>(6)</sup> 報告書に反映された凌純声の苗族史論は、上記のような時代背景を反映したものであったと理解する必要がある。

疎開先に届いた図書室の本を紐解きながら、凌純声は馬毅の論文や、その前後における中国民族論をめぐる論争を、身近なものとして接していたはずである。論争の舞台となった『益世報（昆明）』の「辺疆」副刊の編者は、当時、この地に疎開して雲南大学で教鞭をとり、棕皮營からわずか一キロメートルの浪口村に自宅を構え、歴史語言研究所とも頻繁に往来していた顧頡剛だった。<sup>(7)</sup> そして、以下に見るように、その顧頡剛に対し、影響力を及ぼし、当地の民族論の基軸を用意したのは、歴史語言研究所の所長傅斯年だったのである。

一九三八年十二月、『益世報（昆明）』の「辺疆」副刊上に、辺境民族に関する論文の掲載が始まった。それから一ヶ月余りの一九三九年二月一日、棕皮營の傅斯年は浪口村の顧頡剛に宛て、以下の内容の私信を送っている。

この一週間、訪ねようと思いましたが、果たせませんでした。心中にある一つのことを、申し上げて、参考に供しようと思えます。事は関係するところが小さくなく、公私ともに黙っていることができません。我た

ちは、ここ〔雲南〕に来て、北平〔現北京〕にいた頃の旧来のやり方を一律そのまま続けることはできないのです。

この地〔雲南〕で用いるにあたって、配慮しなければならない二つの名詞があります。その一つは「辺疆〔辺境〕」であり、……その次はすなわち「民族」です。記憶しているのは、五、六年前に弊所〔中央研究院歴史語言研究所〕が、凌純声先生の赫哲族についての研究を刊行した時、わたしは「赫哲民族」という言葉を使わないようにつとめて主張しました。当時、こうした感覚を持ったのは、「民族」という言葉の定義が「民族主義」の本〔孫文の『三民主義』の一節〕の中にもともと備わっていて、この本が〔孫文の遺志を受け継ぐ国民政府の統治下の〕今日においては、法的な効力をもっているものであるから、政府機関の刊行物はとくに、これと相違することがあってはならない、という理由によるものでした。今、西南に来て、このことの政治上の重要性をとくに感じます。そもそも雲南の人が自ら「一つの中国民族だけがある」と言い、その起源を探ろうとしていないのに、この地にいる私たちが、各種の民族名を立てる必要が必ずしもあるでしょうか。今、日本人はシャム〔現タイ〕で、「中国国内の」広西・雲南が泰〔タイ〕族〔Thai〕の故地であると宣伝し、失地回復するよう鼓舞しています。英国人はまたビルマにあつて、「中国」国境内の土司を引き入れ、最近ではさらに中国人〔出稼ぎ〕労働者を取り込んで、積極的に布教しています。雲南西部の仏教については、また仏教立国の邪説があり、政府はこれに対して禁じるべきで、『白国原〔因〕由』（のような文献）はその一つです。（こうした状況であるからには）私たちはまさに「中華民族は一つ」と言うべきです。引きこもって学問をし、その成果を刊行して流通し得ない学術刊行物とする、さらにあるいは政治の参考にし、自ら一握りの事実とするのであれば、顧慮するところはないのですが、それを

大衆化することはしてはなりません。最近の情勢はとりわけ憂慮され、雲南西部はとくに問題です。漢人が蕃夷を侵奪することを厳しく禁じ、あわせて彼らの漢化を加速させ、また一切の漢字以外の文字の通行を制止し、つとめて短い期間で彼らに漢族の意識を貫徹させる、これが正しい道です。民族の名称を立てて分裂の現実を招くようなことは、学者の愛国忠義ではないでしょう。この考えに基づいて、いくつか貴兄に申し上げます。

一、「顧頡剛の編集で連載中の」、「辺疆」副刊の名は、「雲南」・「地理」・「西南」などに改め、「辺疆」という語句は廃止すべきでしょう。

二、それおよびその他の刊行物で、学術刊行物で一般に出回らないもの以外は、地理・経済・物産・政情などの議論だけに限るべきであり、名称を立てた民族の議論を一切してはなりません。

三、さらには、力を尽くして「中華民族は一つ」の大義を発揮し、夷と漢が一つの家族であることを証明すべきです。漢族の歴史が証拠となります。例えば、私たちは、北方人でだけが胡人の血統が混ざっていないと断言できません、南方人でだけが百粵・苗黎の血統が混ざっていないと断言できません。今日の雲南は、実のところ千年百年前の江南・巴蜀に他ならないのです。これは真理に背くものではありません。

先日、友人が、前の〔副刊〕「辺疆」上で、干城という名の者が、「漢人の雲南への殖民は、鮮血によつて書いた闘争の歴史である。今日、辺地の夷民は、なおも時に叛乱を起こす」と論じたのを見ました。鮮血の歴史というのは、もしこの人が少しでも歴史をわかつていれば、それが妄言であるとわかるはずです。友人はそれを驚きにたえず訝しく思いました。わたくしは貴兄が卑見に従うことを願います。「それが」国家に実利あることです（傅斯年「致顧頡剛二函」一九三九年二月一日<sup>(6)</sup>）。

西南の果て、雲南での疎開生活が、傅斯年を敏感にさせたのであろう。彼は、中央研究院が外交部から依頼を受けるよりも前の、一九三九年二月にさかのぼって、ピブーン政権の大タイ主義と日本との関係に注目し、また当時の昆明における民族論の盛り上がり、危ういものと感じ取っていたのである。新聞紙上の「辺疆」欄を主宰し、言わば昆明における民族論ブームの仕掛け人であった顧頡剛は、これを受けて、ただちに「中華民族は一つ」と題する論文を書き上げ、二月十三日の『益世報(昆明)』「辺疆」副刊上に公表した。

昨日、ある旧友から手紙を受け取った。彼は愛国的情熱で長文を寄こしてきたが、その大意は、今、日本人はシャム〔現タイ〕で広西・雲南が揮〔シャン〕族の故地であると宣伝し、それに失地回復するよう鼓舞している。某国〔英国〕人はまたビルマにあつて、〔中国〕国境内の土司を引き入れ、最近ではさらに中国人〔出稼ぎ〕労働者を取り込んでおり、狙いは小さくない。こうした状況の下で、我々は絶対に「民族」の二字を乱用して分裂を招いてはならない。「中華民族は一つ」、これは信念であり、また事実である。……というものであつた。……この旧友の懇切な手紙を読んで、にわかには共鳴と賛同の思いが大いに起こってきた。……国内の各種各族を団結して彼らに「中華民族は一つ」の意識を貫徹させることは、実に建国の先決条件である。……我々中国の歴史には、ただ〔中華〕民族の大きな懐のみあり、種族〔個々の少数民族〕の狭隘な観念は存在しない。〔今〕我々はただ一つ中華民族があり、なおかつ〔歴史上〕久しくこの中華民族があつただのだ。我々は国内各種各族の境界を徐々に消滅させるが、人民の信仰の自由と各地固有の風俗習慣は今後も尊重する。我々は今後「民族」の二字を用いるに絶対に慎重である。我々の内には何ら民族の区分はなく、外に対してはただ一つの中華民族だけがあるのだ(顧頡剛「中華民族は一個」一九三九年二月九日〔十三日刊〕<sup>⑧</sup>)。

傅斯年は、シャムの問題を、英領ビルマからの対土司工作や出稼ぎ労働者への布教、雲南西部の仏教復国運動<sup>(27)</sup>を並列して論じたが、顧頡剛は、ここに見るように、地元での仏教復国運動への言及は避け、英国にも配慮し、シャムと結んだ日本人の謀略としての側面を強調した。そして傅斯年が私信の中で用いた「中華民族は一つ」の句を、顧頡剛は一つのキーワードとして社会に向けて発信したのである。本論文は重慶の『中央日報』ほか、抗戦下の各地の新聞・論著に転載・引用され、当時大きな反響を呼んだという<sup>(28)</sup>。こうして「中華民族は一つ」は政治性をもったスローガンとして、重慶政府下の中国社会に広く流布するに至ったのである。

ここで当時の『益世報(昆明)』において、民族論がどのように展開されたのかという点について簡単に整理しておこう。

【掲載日】

一九三八年十二月十九日

顧頡剛

「『边疆』発刊詞」

一九三九年 一月 一日

顧頡剛

「『中国本部』一名亟亟廃棄」

一月十六日 楚図南

「関于雲南的民族問題」

一月二三日 干城

「雲南民族学会成立」

二月十三日 顧頡剛

「中華民族是一個」

二月二七日 華(張維華)

「読了顧頡剛先生的『中華民國是一個』之後」

四月 三日 白寿彝

「来函」

顧頡剛

「按〔語〕」

五月 一日 費孝通

「關於民族問題的討論」

五月 七日 馬毅

「加強『中華民族是一個』的信念」

五月 八日 顧頡剛

「統論『中華民族是一個』答費孝通先生」

五月十五日 魯格夫爾

「來函兩通」

頡剛(顧頡剛)

「編者按〔語〕」

五月二十九日 顧頡剛

「統論『中華民族是一個』答費孝通先生(統)」

六月十二日 徐虛生(徐旭生)

「用歷史的觀點對魯格夫爾先生說幾句話」

七月十七日 楊向奎

「論所謂漢族」

以上の諸論文の中で、傅斯年が先の私信の中で批判の矛先を向けたのは、干城「雲南民族学会成立」(二月三日)の「漢人の雲南への殖民は、鮮血によつて書いた闘争の歴史である」という歴史的解釈であつた。この一週間前に掲載された楚図南「雲南の民族問題について」(二月十六日)にも、「漢人が雲南に殖民した歴史は、ほとんど純粹に民族の闘争の歴史である」という記述があつたことが知られる。干城論文はそれを受けたものであり、傅斯年は楚図南を含めて批判していたと考えるべきである。干城については不明ながら、楚図南は顧頡剛と同じく雲南大学文史学系で教鞭とつていた。馬毅も論文の中で「歴史学者」を批判しているが、これもまた彼らのことを指していたのである。

上の一覧に傅斯年の私信(二月一日)を加え、当時の昆明における民族論の展開をたどるなら、馬毅の論文「『中華民族は一つ』の信念を強くしよう」は、その表題だけでなく論旨からも、傅斯年から顧頡剛へと受け継がれた流れを

さらに継承したものであることが明白である。そしてその馬毅論文では、傅斯年が警戒した英領ビルマからの動向や、雲南西部の仏教復国運動についてはまったく抜け落ち、日本のみを敵視する姿勢が強調され、シャムの改称問題に加えて、「苗族復興運動」への警戒が提起され、苗族史論に注意が向けられた。傅斯年による新聞紙上での用字に関する助言は、顧頡剛と馬毅を経て民族史論の問題へと昇華され、すでに見たように、最終的には政府の教育政策に影響を及ぼすに至ったのである。

##### (5) 歴史学者と人類学者——二つの立場

上の一覧に見るように、顧頡剛「中華民族は一つ」に対しては、馬毅のようにそれに追隨する議論だけではなく、批判も「辺疆」副刊には寄せられている。その代表が、雲南大学社会学系の人類学者費孝通による「民族問題に関する討論（四月九日）」<sup>(81)</sup>である。

これに対する顧頡剛の「『中華民族は一つ』を続論して費孝通先生に答える」という反論は、同年五月八日に「辺疆」副刊に掲載された。それが四月二四日から五月六日まで長い時間をかけて用意されたものであり、その間に傅斯年と意見のやり取りも行なわれていたことが、顧頡剛の日記から確認される。また後に書かれた傅斯年の私信にも、顧頡剛が費孝通への反論を書くに至った経緯が述べられているものがある。顧頡剛の費孝通への反論には、「中華民族は一つ」と同様、傅斯年の意向が反映された可能性が考えられるのである。<sup>(82)</sup>上記の馬毅の論文もまた、顧頡剛のこの反論掲載の前日に、『益世報（昆明）』上に掲載されている。これも顧頡剛による反論の「露払い」であったと理解すべきであろう。

このように、抗戦下の昆明における民族論の基調は、当時この地に疎開をしていた知識人たちの濃密な人間関係の中で形作られたのである。すでに論じたように、かつて顧頡剛は、上古史料にメスを入れる作業の延長として、漢族概念の虚構性に注意を向けるようになり、華北への日本の圧力が強まる中で、「民族」と「種族」を異なる概念として区分することを着想するに至った。傅斯年もまた、かつて広州にあつた時、自ら民族学に関心を示し、顧頡剛とともに中山大学語言歴史学研究所、中央研究院歴史語言研究所を立ち上げ、そこで民族学を柱の一つにすることを構想した。北平に移った後も、「東北」史でツングースを論じ、中原民族史で歴史と文化集団の關係に注目し、考古学調査を河南と山東で進めたが、その中では一貫して文化や系統を異にする集団が一体性を保ちながら歴史を展開してきたことに注意が向けられていた。こうした二人の歴史家としての「民族」への関心が、凶らずも日本との抗戦によって、一九三九年の昆明で合流し、馬毅という協力者を得て、新たな時勢に見合う民族論の潮流を形作つたと言えるのである。

このような背景の下で世に出された顧頡剛の「中華民族は一つ」論に対し、批判を唱えた費孝通の主張とはいかなるものであり、またそれに顧頡剛らはどのような反応を示したのだろうか。費孝通の主張とその学術的背景については、一九三九年七月、中英庚款董事会の朱家驊・杭立武に対し、傅斯年を送つた以下の私信に要約されている。

その〔顧頡剛の議論の〕中には欠陥もありますが、発想は非常に正大で、まさに今日政治的に民族問題に対する唯一の立場です。呉〔文藻〕はその弟子である費孝通に反論させ〔「關於民族問題的討論」〕、「中国本部」という名称には科学的根拠があり、中華民族は一つであるといふことはできない、苗・獠・猺・獯はみな民族である、と述べました。帝国主義が植民地を論ずる一切の道理を、彼はみな受け入れたのです（傅斯年「致朱家驊・杭立

武函」一九三九年七月<sup>(64)</sup>。

当時、雲南大学では、中英庚款董事会の助成を得て、呉文藻を主任とする社会人類学講座が成立しており、費孝通はその構成人員の一人であった<sup>(65)</sup>。呉文藻は傅斯年と同世代で、清華大学を経てアメリカで社会学を学び、費孝通は、傅斯年たちよりも一世代下で、燕京大学から清華大学を経てイギリスで社会人類学を学んだ<sup>(66)</sup>。彼らは、顧頡剛の主張を実態に見合わない<sup>(67)</sup>と批判し、顧頡剛らが「一つ」と考えた中国の民族構成を、「一つではない」多民族から成るものとして批判を加えた<sup>(68)</sup>。これは歴史学者たちが「中華民族」論を現代民族論として鼓吹することに対する、民族の実態を知る第一線の研究者からの批判であった。

しかし上に挙げた私信・論文に見るように、当時の傅斯年・顧頡剛には、知識の「啓蒙」よりも、課題としての「救国」が優先するという姿勢が明確にあった。そして問題意識としても、現状が歴史的所産であるという独自の視点があったのである。彼らは現状分析を動機付けとしながらも、民族論としてはなく歴史論として、歴史的視点から「中華民族は一つ」と主張した。一九三九年の昆明学術界には、「民族」の評価をめぐって、このように歴史学者と人類学者の二つの異なる立場があったのである。

#### (6) 傅斯年の民族観——近代「優勝劣敗」論の昇華

ここで傅斯年の民族観について考えてみよう。傅斯年が、若くして中国近代学術体制の構築を担う立場にあり、広州・北平・南京と身を置き換えながら、言語・民族・歴史・考古にまたがる領域で、数々の論考を発表してきたことについては、小文でこれまでも取り上げたとおりである。しかし中国全体を「民族」という概念でどのように歴史的

に体系付けるかという点については、傅斯年「中国史時代区分の研究」(一九一八年)において中国史と民族の関係性についての着想が示されながら、以後、まとまった文章として世に出されることはなかった。傅斯年の民族観を示すものとして広く知られる「中華民族は全体的〔まとまり〕である」(一九三五年)もまた、日本による華北「特殊化」論を受けた華北の分離(「自治」)に警鐘を慣らす意図で書かれた現状認識論である<sup>(8)</sup>。

その傅斯年が、一九三九年にどのような民族論を持つに至っていたかという点については、先の私信の記述に加え、さらに具体的な考え方を示すものとして以下の記述がある。

この地の漢人は、その祖先が純粹な漢人である者は、もともと少数です。今日漢族がこの地に多数いるのは、同化のためです。この〔同化〕力は、漢族の最も偉大なところであり、ゆえに漢族は一つの種族ではなく、一つの民族なのです。……今、内地から〔昆明に〕避難してきた「学者」は、ここに来た後、新聞紙上で論文を発表し、これらの地域は猥獠、これらの地域は瘴夷などと言い、さらには中華民族は一つでなく、これらはみな「民族」で、自決権を持っており、漢族はこれらを「少数民族」と軽視してはならないと言います。……この地でまさに同化が進行しつつある中で、これらの「学者」が来て、こうした議論をなし、単に同化に対して打撃を与えるだけでなく、国族の分化意識を専ら刺激し、部族意識を増長させています。……そもそも学問は政治の支配を多く受けるべきでないというのは、当然のことです。しかしもしくだらない学問が、その悪影響を政治に及ぼすのなら、当然取り締まるべきです。呉某〔呉文藻〕が立ち上げた民族学会は、まさに専らこれらの詭計を提唱するものです(傅斯年「致朱家驊・杭立武函」一九三九年七月)<sup>(9)</sup>。

このように傅斯年は、「民族」を論じる呉文藻たちの人類学(民族学会)を、「くだらない学問」として切り捨て、

それを助成している朱家驊に悪弊を訴えたのである。

傅斯年が呉文藻を批判するキーワードとしたのは、「同化」という概念であった。傅斯年は顧頡剛にならって「種族」と「民族」を辨別するが、「漢族」を種族ではなく民族とする。すなわち「漢族」が国族であり、また「一つ」であるとした「中華民族」そのものという認識である。それをかろうじて単純な「大漢族主義」と區別するのは、「漢族」を「漢人」と同等概念とせず、「同化」を続けてきたという歴史的な視点によって特徴付ける発想である。しかしその趣旨は、民国初年における梁啓超の「中華民族」論<sup>(40)</sup>と本質的に異なるものではない。

傅斯年のこの時期における民族観を、より具体的に示すものとして、以下の文章がある。

漢族という名は、今日においてすでに論理性を失っており、漢人という名を用いる方がいい。どうしても族と言わなければならないのなら、すべては中華民族である。そもそも族が族である所以は、血統がつながっていることによるのであり、家族〔概念〕を拡大したようなものである。ところが漢人の偉大なところは、その血統が単一でないところにあり、歴史的に、外来の血脈を吸収しない時はなく、そのために智力を維持し、その力の大きさを保つことができたのである。……今日、西南のいくつかの部族の人が漢人に変容している現象は、我々の祖先が千年前に経験した現象である。こうした無形にして有質、常に流れて目に見えない過程が、漢人の命脈を延ばし、漢人の数を増やし、漢人を長いあいだ新しい環境に適合させ、天の選択を経てますます優れ勝る存在にした、その所以なのである（傅斯年「中国民族革命史」一九三九年<sup>(41)</sup>）。

これはちょうど昆明で論争が起こっていた一九三九年前半に、重慶政府の要請を受けて、傅斯年が執筆したと見られる論文原稿の一部である<sup>(42)</sup>。先の私信とは異なり、血統の混合に重きを置いて議論がなされている。特徴的な議論と

しては、「漢族」概念を否定し、「中華民族」の枠組みの下で「漢人」として位置付け直す点がある。しかし結果として主張されるのは、「漢人」への一方的「同化」であり、「家族」の拡大に喩えられた「血脈」の吸収が、「漢人」に活力を与え、「優勝」者にしたとする発想である。これは盧溝橋事件に前後して、顧頡剛や斉思和・譚其驤が提出した、「民族」と「種族」を辨別し、双方向的「同化」を論じた主張と比較すれば、明らかな後退であり、そこにはむしろ近代以来の「優勝劣敗」論の痕跡が認められる。「漢族＝中華民族」とし、血統が混ざっていることによって、その優秀性を説く傅斯年の民族観には、近代の「優勝劣敗」論を、新たに「人種」論として昇華させたものとしての特徴が見出されるのである。

#### (7) 血統「混合」論と「同源」論

一九三九年二月、顧頡剛の論文「中華民族は一つ」が、昆明で新聞紙上に掲載された時、傅斯年は、重慶で開幕した国民参政会第三次大会に、参政員として出席していた。<sup>(45)</sup> 同大会には、「海外華僑」参政員として、上述のシャム華僑陳守明も出席したとされる。大会期間中には、参政員の居勵今が「西北と西南の開発には、まず蒙古・チベット・回・苗の各族を團結させなければならぬ」とする議案の中で、「歴史の中から満洲・蒙古・回・チベット・苗の血統が（「漢族と」同じである根拠をさがして宣伝する」という提案をなしている。<sup>(46)</sup> これは、この時期の重慶政府の下で、西南民族という存在が旧来の「五族」と同格に注目されるようになり、「血統」的に「一つ」であることが新たに探究されるべき課題として意識されつつあったことを物語る。

このように、「血統」の歴史的融合（同化）を説いて中華民族（漢族・国族）の構築性を強調し、一致団結して抗戦

にあたる主張が、昆明と重慶で時を同じくして現れた頃、一方で本源的な「同祖」「同族」論によって、中華民族（漢族・国族）の原初性を強調する主張も出現した。顧頡剛「中華民族は一つ」の発表から間もなくして、重慶の国民党中央執行委員会宣伝部が発行する『中央週刊』上に発表された、「苗夷漢同源論」という論文である。著者の張庭休は以下のように述べる。

近ごろ多くの人が苗夷問題を研究し、これは喜ぶべき現象だが、根本的な間違いに陥るのを免れていないのは、苗夷について漢族以外の民族と認識していることであり、本論の目的は、この間違いを正そうとすることである。……漢族は中華民族の代名詞であり、この民族を構成する分子は、歴史にさかのぼってみると、実に複雑きまわらる。今のいわゆる苗夷などの人々は、当然この漢民族全体を構成する重要な分子なのである（張庭休「苗夷漢同源論」一九三九年三月）。

ここでいう苗夷問題への関心の高まりとは、本篇で論じてきた一九三九年前半の昆明を含む、重慶政府下の各地の状況を指すものであろう。これに対して危機意識を抱いたという点では、昆明の傅斯年・顧頡剛と違いはない。しかし張庭休は、現実や歴史的過程として「一つ」であるということではなく、起源として「同じ」であると主張することによって、苗夷という民族区分が成り立たず、それが「漢族＝中華民族」の構成要素であることを論じ、苗夷を区分する発想そのものについて批判したのである。

張庭休は、さらに本論文の増補版を「再論夷漢同源」（一九三九年五月）と改題し、昆明の『西南边疆』に再寄稿している。そこで張庭休は、「夷漢言語の同源」「神話と伝説の同源」「形質（人類学的）相同」を述べた上で、「夷漢の混合」について歴史的に論じる。<sup>40</sup>『益世報（昆明）』を舞台に、顧頡剛・馬毅・費孝通によって、「一つ」「一つでない」

をめぐる論争が起きていたところに、「同源」であるとする議論が新たに加わったのである。

張庭休と同じく「同源」論を主張する論文は、その後相次いで発表され、<sup>(註)</sup> ついには蒋介石により、『中国之命運』（一九四三年）の中で、民族間の関係を血縁関係になぞらえた、「宗族」論が展開されるに至ったのである。蒋介石は内には民族意識を鼓舞し、外には抗戦の意義を主張し、国際的地位を回復する意図で書かれたこのパンフレットにおいて、以下のように訴えた。

我々中華民族は自然に成長する過程で、外からの侮辱を共に防ぎ生存を保障するため、力を結集し国家を締造した。中華民族はその宗〔本〕支〔枝〕が絶えず融和し、人口も次第に増加し、それで強大になり、こうして国家の領域もこれにもなって拡張した。……民族の成長の歴史から言えば、我々中華民族は多数の宗族が融和して形成されたものである。中華民族に融和した宗族は、歴史的に増加したが、融和の動力となったのは文化であって武力ではなく、融和の方法も同化であって征服ではなかった。（紀元前）三千年前、我々の黄河・長江・黒龍江・珠江の流域には、多数の宗族がその間に分布していた。五帝以後は、文字の記載が多く、宗族の組織は、より一層明らかであり、四海〔天下〕の内、各地の宗族は、一つの始祖の同源でなければ、世代を超えて互いに結ばれた婚姻関係にあつた……同一血統の大小の宗支なのである。……各宗族の間には、血統が互いに繋がっているほか、さらに婚姻の結び付きもあつた。古代中国の民族はこのように構成されたものである。ゆえに今この時期、中国全体の国民が、「四海の内はみな兄弟である」という崇高な倫理観念を持ち、博大な仁愛精神を興すことは、決して虚しい空言ではない（蒋介石「中国之命運」一九四三年三月）。

これは、一見すると前近代の「一視同仁」思想、民国初年の「五（六）族同祖」論（夏德溼）の焼き直しのような、

古い「華夷」観を引きずった「同祖同化」論としての印象を受ける。しかし、小文のここまでの考察を踏まえるなら、それが実は一九三七〜三八年における「民族」「種族」辨別の発想（顧頡剛・斉思和）の応用で、「血統」論（顧頡剛・斉思和・譚其驥）の継承発展であり、また一九三九年における「中華民族は一つ」論（傅斯年・顧頡剛）、「血統の吸収」論（傅斯年）、「家族の拡大」論（傅斯年）、「同源」論（張庭休）のすべてを折衷的に取り込んだ、新しい民族論として位置付けるべき性質を持つことが見て取れよう。蒋介石は、中国の歴史を、黄河流域の中原だけでなく、長江にまで広げて語っている。「宗族」の中に西南民族が含まれることは言うまでもない。以後、重慶政府の下では、「（中華）民族」の下位概念は「宗族」であるとす暗黙の了解が生まれ、政府文書のみならず、学術界での議論の中にも、それが反映されるようになっていくのである。<sup>⑧</sup>

#### (8) 「中華民族」論と「疑古」史観——「苗夷」の主張

ところが、傅斯年・顧頡剛については、「同源」「同祖」「宗族」論のいずれにも呼応した様子は認められない。「同化」論から一步踏み出してこれらを主張すれば、中国上古史の解釈に踏み込まざるを得ないが、その立脚しているものの危うさについては、彼らは十分に理解していたのである。

一九三九年に、顧頡剛の下には、「苗夷」を名乗る読者から二通の投書が寄せられた。顧頡剛は、これに対し、「同源」論への反発を「疑古」史観によって和らげる試みをしている。以下、少し長くなるが、一九三九年の民族論争に対する苗夷の声を反映した貴重な史料であるので、投書の内容を全面的に取り上げて紹介したい。

近ごろ、苗夷漢同源論を大いに提唱する人がいます。わたしは苗夷の一人です。わたしはこの問題について賛

成もしないし、反対もしません。しかしわたしの見方によれば、今日団結してともに国難にあたるために、何も学者たちが声高に同源論を唱える必要はありません。私たちは忌み避ける必要はないのです。苗族の歴史はそれを書いた史書がなくても、漢族と同源であるとは、夷苗自身は決して承認しません。同源か同源でないかは、夷苗は関知せず、ただ政府当局が本当の平等の権利を与えることを望むだけです。敬具。魯格夫爾拜。（一九三九年）四月二十九日。

この全面抗戦の時にあたり、由来を宣伝して民族意識を見きわめ、高めるのが主流ですが、宣伝の担い手たちは「民族」についての宣伝にあまり注意を払っていません。およそ国内の民族の団結にかかわる言論は慎重に執り行なうべきであり、軽率に取り上げてむやみに声を上げてはなりません。近ごろ非常に多くの図書雑誌の言論、および要人名士の演説では、そろって「我らは黄帝の子孫である」と言っています。民家でも入口の対聯に「黄帝の子孫は漢奸にならない」と書いてあります。表面的には悪くなさそうですが、詳しく考えると実に大きく誤っています。このような宣伝は、抗戦の目的は国のためではなく漢族のため、建国とは漢族の国を建てることだと示すものです。もし蒙古・チベット・回・夷苗の同胞が聞けば、当然反対するはずですが、彼らが盲目的に漢人がむやみに上げる声に従って黄帝を祖宗と認めるはずありません。だから各民族を団結させて一致抗日させたいのなら、かたちを変えた大漢族主義の宣伝については絶対に禁止すべきであり、それによって民族間の摩擦を引き起こし、敵に分裂の口実を与えることがないようにすべきです。編者様、いわゆる「国族」のスローガンの下「黄帝の子孫」を大いに提唱する政策に、私たち黄帝の子孫でない者たちは引き続き労力を供出し資金を供出すべきでしょうか。どうか私のこの考えを貴紙に掲載して下さい。……蛮夷之民魯格夫爾拜。三苗の子孫（印

章?」。(一九三九年) 四月三十日。<sup>(6)</sup>

魯格夫爾という人物については、実体は不明であるが、小文で取り上げた石宏規・石啓貴(湘西苗族)・高玉柱・金国光(西南夷族)・楊漢先(石門坎苗族)と同様に、民族意識の覚醒を経た西南民族エリートの人であったと推測される。最初の投書が、その一ヶ月前に発表されていた、前述の張庭休「苗夷漢同源論」(一九三九年三月)を意識した発言であることも、ほぼ間違いないであろう。<sup>(6)</sup> 一方的に提示された「同源」論に対し、区分として存在しないとされた「苗夷」の立場から、異議申し立てがなされたのである。

二通目の投書では、始祖という点から、漢族と「苗夷」の立場が相容れないことが主張される。国共両党が、一九三七年四月の清明節、代表を陝西省黃陵県橋山の「黃帝陵」に派遣し、国民党政府主席林森とソビエト政府主席毛沢東の名義で公祭を行なったように、日本との対立を背景に、全国各地では「黃帝の子孫」を掲げる中華ナショナリズムが高まっていた。これに「苗夷」「蛮夷之民」魯格夫爾は反発し、自分たちは「黃帝の子孫」ではないと表明し、異なる始祖意識を鮮明にしたのである。彼の自己認識は「三苗子孫」の四文字に集約されている。魯格夫爾の主張の背後には、蚩尤を始祖とする典型的な苗族先住説が読み取れるのである。<sup>(6)</sup>

これに対して顧頡剛は、「辺疆」副刊の編者として、以下のように回答した。

私たちは魯格夫爾氏の投書に、大いに同情を示す。……我々の団結の基礎は、「団結すれば生き延び、団結しなければ死ぬ」という必然の趨勢の上に成り立っており、仇を同じくし敵愾心をもつという一致する気持ちの上に成り立っているのであって、一つの種族の上に成り立っているのではなく、ましてや一人の祖先の上に成り立っているでもない。漢と苗がもし同源ならば、もとより非常によいことだが、同源でなくても、互いに団結する

気持ちは少しも影響ないはずである。……「我らは黄帝の子孫である」とか、「黄帝の子孫は漢奸にならない」と言うことについては、漢人が漢人に発した言葉であり、全国の人民に発した言葉ではない。……漢人は黄帝の子孫、苗人は三苗の子孫、そのどちらも実は昔の人にだまされたものである。本月五日の『益世報』「星期評論」欄の馬毅氏の「『中華民族は一つ』の信念を強くしよう」という論文が、非常にはつきりと説明しているように、苗人のもとの名は髡で、宋代以後の人がそれを知らずに苗と改めたが、この一字が変じてついに数十世代の人を混乱させ、苗人が黄帝と戦った蚩尤の子孫となるとは、思いもよらなかつたのである。黄帝は昔の人の伝説中の上帝〔天帝〕の一人であり、実際には存在しない。三苗は『尚書』の記載から言うと、彼らは早々に〔今の〕甘肅の地に移住しているのであり、黄帝と蚩尤が戦つたということは根本的になく、三苗の子孫が西南に留まつたなどということとはさらにはありえないのである。したがって漢人が「黄帝の子孫」と自称するのはもとより改めるべきだが、魯格夫爾氏が「三苗の子孫」と自称するのも、実のところ改める必要がある。どの種族も歴史上の一人の有名人を持ち上げて自分たちの祖先とするのを総じて好む。これはそもそも昔の人の習慣である。私たちは今日を生きているのだから構わずそうである必要はないのである（顧頡剛「編者按〔言語〕」一九三九年五月十三日）。

顧頡剛は、この一週間前に掲載された馬毅の論文「『中華民族は一つ』の信念を強くしよう」を引きながら、上古史に対する「疑古」の立場から紛糾の解消を図り、苗族の蚩尤始祖説と漢族の黄帝始祖説を、いずれも信史ではなく偽史であるとして、ともに否定したのである。顧頡剛の上古史研究者としての立場と、「中華民族」論の構築を急ぐナショナリストとしての立場の合流を、ここに見ることができる。

## (9) 小結

以上、抗戦下の民族エリートと重慶政権の関係、知識人の動向をあとづける中で、「抗日ナシヨナリズム」の二面性を指摘し、「苗族復興運動」の実態を明らかにし、一九三九年の昆明を中心として抗戦期の苗族史論の歴史的位相について論じた。

中国民族論は、清末以来、北方や中原を軸に構想されてきた。しかしこの時期に至り、南方要因が顕在化したのである。本稿で重点的に論じたように、抗戦下での中国民族論の形成において、昆明という場が果たした役割は大きい。そしてまた、それを刺激したのは日本の南進政策だったのである。知識人たちが警戒したように、当時の西南中国では、歴史意識の再生を伴なう「苗族復興運動」と、地域・民族を越えた西南民族の連帯形成が進みつつあった。またそこには、「国族」としての一体性を強調する議論を真正面から批判し、「黄帝の子孫ではない」と明言する立場も現れた。顧頡剛のように、それを説得する試みもあったが、苗族先住説はその後も持続して今日に至っている<sup>(8)</sup>。戦後、南京に復員した国民党政権は、苗族を含む西南民族に代表枠を設けて国民大会を開催し、抗戦期に浮き彫りになった各種の矛盾を、国民大会と憲政実現で一気に解決しようとする。ところが、かえって問題が噴出し、中国国内は大混乱に陥るのである。

こうした経緯をその後の展開を見据えて理解しようとする際、民族学者の江応樑が、憲法の下で初めての国民大会が開かれようとする中、西南民族について述べた以下の発言は、示唆的な内容を含んでいる。

西南の辺民〔辺境民族〕に対し、もし過去に蒙古・チベットを撫慰したような方法を用い、一人二人の首領を籠絡し、全体の辺民に及ぶことを望むのであれば、これは絶対に不可能なことである。……抗戦前に一人の女子

が雲南土司総代表と自称し、南京・上海一帯で自分を売り込み、中央はついに辺疆宣慰団の名義を与え、雲南辺境に行つて宣慰させることにしたが、結局、一部の人々にアヘンの商売をさせただけであつた。そしてこの総代表は、彼女の地元の県の土司さえ彼女の代表資格を承認せず、真の有力な土司は、土司の中にこのような女子がいることさえまったく知らなかつたのである。近ごろ、西南五省辺民総代表、あるいは西南五省土司代表と自称する者が、朝野を奔走し、勝手ほうだいに活動しているが、我々がとても訝しく思うのは、この〔西南〕五省に数十数百種類の異なる言語があり、暮らしている場所が隔絶して往来もない、一千万近くの辺民たちが、どうやってまとまり、どうやって代表としたのか、ということである（江応樑「請確定西南辺疆政策」一九四八年三月）<sup>64</sup>。

文中で言う「雲南土司総代表と自称」した女子が、「西南夷族」代表を名のつた高玉柱を指すのは間違いない。江応樑は、国民大会の「辺疆地区」民族枠とその代表選出の方法に対し、抗戦前夜の経緯を踏まえ、民族学者としての自らの知見と学術的知見から、西南中国の実態に基づいて、疑問を提起したのである。

西南民族を蒙古・チベットに対する政策と同列に扱い、「辺疆民族」という大きくくりで西南各省に代表枠を設けることへの批判は、中国の諸民族を総体としてどのように評価するかという問題と密接に関わつてゐる。江応樑が強調したように、西南中国の民族集団は多く、言語・習俗・生活様式も多様であり、これらは確かに他の民族地域とは異なる特徴である。さらに付け加えるなら、西南中国の諸民族が、固有の民族意識を持ちながらも、歴史的には漢族に接して暮らしてきた集団であり、傅斯年や顧頡剛が主張したように、歴史的な「漢化」という側面が否定できない点も、それを他の地域と区別する重要な要素である。近代以来「六族」ではなく「五族」とされ、西南民族を「優勝劣敗」から「同化」論によってとらえる展開が生じた根本的な理由も、この点に存在するのである。

本稿で論じたように、「抗日ナショナリズム」の下、西南中国では、個別の民族意識とともに、地域や民族を越えた連帯も芽生え始めていた。そしてその根底で共有されていたのが、先住者としての苗族先住説に立つ歴史認識であった。国民党政権は彼らを「土著」「辺疆」の枠組みによって一括しようとしたが、共産党政権は中華人民共和国の建国後、「民族識別」によって細分化する方向を目指した。共産主義者たちが採用したのは、民族間の対立を階級闘争として直視する新たな民族史観であり、こうした歴史を評価材料の一つとして「民族識別」は進められた。その結果、国民党政権の下で政策的に一括されていた西南民族は、新たに複数の「少数民族」に区分され、個々の少数民族独自の歴史意識が形成されていくのである。

(以下、続篇)

### 【註】

(314) 拙稿「苗族史の近代(五)」、『北海道大学文学研究科紀要』一三一、二〇一〇年。なお、本稿で取り上げる史料の中には、日本と敵対していた重慶政府下で刊行された図書・新聞・雑誌記事や檔案など、歴史的背景や史料の性質によって、日本国内の公的機関には所蔵されないものが含まれている。そこで、それらのうち本文中で紹介したものを中心に、できるかぎり史料の原文を註に収録しよう心がけた。ただし、引用に当たっては常用漢字化を原則とし、句読点については筆者が新たに加えたものもある。

(315) 以下、本文中で政治史的事件に言及するにあたっては、郭廷以編著『中華民國史事日誌』中央研究院近代史研究所、一九七九〜八五年、および朱漢国主編『南京国民政府紀実』安徽人民出版社、一九九三年を参照した。

(316) 龍雲については、菊池一隆「雲南省の戦時経済建設」、『中国史における中央政治と地方社会』昭和六十年科学費補助金総合研究(A)研究成果報告書、出版地不明、一九八六年、潘先林『民国雲南彝族統治集團』雲南大学出版社、一九九九年、前掲注87石島紀之『雲南と近代中国』、および汪朝光「蒋介石与一九四五年昆明事変」、『民国人物与民国政治』社会科学文献出版社、二〇〇九年を参照。龍雲は、土司が「雲南の(外敵からの)防衛をなす者であり(為雲南保障者)」、「軽々に見捨てる(軽于棄捐)」ことがあつて

苗族史の近代 (六)

はならないと述べ、土司の役割を認めていた(龍雲「重印『万曆雲南通志』序」(筆者未見、前掲潘先林『民国雲南彝族統治集團研究』所引)。

(317) 劉文輝「走到人民陣營的歷史道路(一九六二年)」、『走到人民陣營的歷史道路』三聯書店、一九七九年、および前掲注87石島紀之『雲南と近代中国』参照。

(318) 前掲注87石島紀之『雲南と近代中国』参照。

(319) 西康省の成立をめぐることは、李亦人編著『西康綜覽』正中書局、一九四七年、および今井駿「劉文輝の西康省経営と蒋介石」石島紀之ほか編『重慶国民政府史の研究』東京大学出版会、二〇〇四年を参照。

(320) 前掲注317劉文輝「走到人民陣營的歷史道路」参照。

(321) 劉善述『湘西苗族革命史考』中国文聯出版社、一九九九年。

(322) 石宏規については前章を参照。劉善述『革命運動中的主要人物簡介』(前掲注321劉善述『湘西苗族革命史考』所収)によると、一九三四年夏に乾城県長、一九三六年夏に湖南省第三区專員公署主任秘書、同年八月に湘西屯務処副処長を兼任、同年十二月に国民大会(湖南省)代表に選出、一九三九年に湖南省臨時参議会参議員に任命され、一九四一年春に参議員を辞して湖南省土地陳報処副処長、一九四三年に南岳管理局局長を歴任、一九四七年に中央の立法院委員に選出、一九四九年に故郷湘西の永綏から重慶を経て台湾に向かい、一九八二年に台北で死去し(享年八六歳)、台北碧潭安坑墓園に埋葬されたことが判明する。

(323) 前掲注321劉善述『湘西苗族革命史考』参照。抗戦下の苗族による蜂起をめぐることは、前掲注320張兆和論文を参照。

(324) 無記名「湘特殊部隊派員献旗」『申報』一九三九年十月十八日、無記名「湘特殊部隊在渝献旗」『申報』一九三九年十一月七日、および無記名「湘特殊部隊向蒋献旗」『申報』一九三九年十一月十一日。

(325) 無記名「蒙藏回族代表謁蒋委员長献旗」『申報』一九三八年四月二〇日。

(326) 「西南夷族」高玉柱らの活動については、前掲注320張兆和論文のほか、婁貴品「不遠万里、為謀團結——一九三七年西南少数民族請願代表在上海的活動追述」『中国民族報』二〇〇九年十一月二〇日、伊利貴「永勝高氏土司与『改土歸流』」『学理論』四、哈爾濱市社会科学院、二〇一〇年、婁貴品「一九三七年西南夷苗族請願代表在滬活動追述」『民国档案』二、中国第二歴史档案館、二〇一〇年を参照。

(327) 無記名「三中全會明日召集、各中委紛紛報到」、『申報』一九三七年二月十四日。

(328) 無記名「何鍵電請四省邊區設管理夷苗機關」、『申報』一九三七年四月二十六日、および前掲注298警中「応如何除国内各民族間の畛域」参照。

(329) 無記名「湘主席何鍵電促高玉柱速入湘」、『申報』一九三七年四月二十七日、無記名「高玉柱等籌組西南邊疆開發協會——本週内可成立籌備會後入湘」、『申報』一九三七年五月四日、無記名「高玉柱等將赴湘推進夷民文化」賴璉又来電敦促」、『申報』一九三七年七月四日。高玉柱に対する何鍵の接近が当時社会に広く知られていたことは、「早在抗戰初期就激起以龍雲卿(飛)為首的湘西苗民暴動(有不少漢人參加)、公開反对国民党政府、發表倒蔣宣言。国民党反動派除派遣大軍『進剿』外、還勞得苗族貴婦高玉柱小姐前去『宣慰』」(呂振羽『中国民族簡史』三聯書店、一九五一年)という記述からうかがわれる。

(330) 無記名「滇省各土司否認高玉柱為代表」業已電呈中央声明、对高行動不負責任」、『申報』一九三七年七月八日。

(331) 無記名「高玉柱对滇否認提出答辯理由」、『申報』一九三七年七月八日、および無記名「西南夷族沿边土司代表对請願事發表宣言」、『申報』一九三七年七月十一日。

(332) 無記名「高玉柱練夷兵」、『西南導報』一一一、西南導報社、一九三八年五月。原文は「西南夷族北勝土司高玉柱及夷民代表喻杰才氏、去年曾代表西南沿边二十一土司赴京請願、在京滬一带備受各界歡迎、……高氏自滬戰爆發後、憤於日寇之不顧人道、即兼程趕回雲南。近革命耆宿向海潛氏接喻氏自貴陽來函、詳述回南後与高氏分赴湘西・川南及滇・黔・西康一带边区工作情形、並述高氏本人現已進入大梁(涼?)山、截至目前止、已編成從未開化之夷兵四大隊、共計約四千餘人。并与夷苗領袖共同發起組織西南边区夷苗抗日後援會、及夷苗抗日義勇軍。声明将来動員可三万人以上。現聞已呈請中央請求簡派大員指導一切、以便開赴前線參加抗戰」である。

(333) 高玉柱「動員夷苗民族与抗戰前途」、『西南導報』一一四、西南導報社、一九三八年七月。

(334) 中国第二歴史档案馆藏国民政府社会部档案・档号不明「高玉柱等呈報發起組織西南邊疆文化經濟協進會及社会部胡星伯等簽呈(一九三八年十二月)」(中国第二歴史档案馆編『中華民国史档案史料匯編』五一・二・文化二、江蘇古籍出版社、一九九八年所収)。

(335) 金国光「略憶參加『西南夷苗民族解放大同盟』前後」中国政治協商會議貴州省大方県委員会文史資料研究委員會編『大方文史資料選輯』五、同委員会、一九八九年。

(336) 前掲注335金国光「略憶參加『西南夷苗民族解放大同盟』前後」参照。

(337) ただし、一九三八年の「西南辺疆民族文化經濟協進会」が、「西南各省辺区」を対象とすることを明言するにもかかわらず、発起人の中に石宏規・石啓貴など湘西のエリートや、かつて高玉柱たちの「代表」資格に異議を唱えたタイ系諸族の雲南西南部の土司の名前は見当たらない。また一九三九年後の「大同盟」「辺宣団」の活動も、雲南・四川・貴州の「夷族」(現彝族)を中心とするものであり、ビルマ国境から湘西にまたがる広範な連携は、課題としては意識されていたとしても、実態としてはなおも未確立であったと理解される。

(338) 前掲注316参照。

(339) 前掲注335金国光「略憶参加『西南夷苗族解放大同盟』前後」。

(340) 前掲注335金国光「略憶参加『西南夷苗族解放大同盟』前後」。

(341) 前掲注335金国光「略憶参加『西南夷苗族解放大同盟』前後」。

(342) 馬毅については、前掲注110顧頡剛『顧頡剛日記』四および十一(一九三九年九月二〇日)、前掲注299徐友春主編『民国人物大辞典』所収「附録」を参照。

(343) 馬毅「堅強『中華民族是一個』的信念」、『益世報』(昆明)一九三九年五月七日。原文は「『陸地香港』的××地方、苗族同胞、被人欺騙・挑発、強調苗族是中国的主人翁、歴史在五六千年前即居住在黃河流域、被西来的漢民族所驅逐。所以他們醞釀苗族復興運動、宣伝一律使用苗語・苗文、誦苗書、穿苗人服裝、禁止与漢人通婚」である。

(344) 馬毅「苗族教育之檢討与建議」、『西南辺疆』七、西南辺疆出版社、一九三九年十月。原文は「貴州××、曾有××人團結復故地之運動、……有部分国人、不諳辺疆情况、未知總理民族主義之内容、妄引李寧・史大林之理論、反足引起少数民族之糾紛、適墮帝國主義的挑撥離間分化我民族、誘拐我民族之陰謀」である。

(345) 馬毅・顧頡剛「建議訂正歴史上有碍障礙國族團結之伝説案」教育部編『教育部史地教育委員會概況』二、教育部、一九四一年。馬毅・顧頡剛の提案原文は「某省某区(密)曾有大規模苗族復興運動、主其事者皆為国内外專科以上學校之學生(名密)強調民族五千年前為中国主人翁、居住黃河流域、被漢族所驅逐、遂致貳(式)微、故宣伝一律使用苗語・苗文、誦苗書(実并無文字)、穿苗族服裝、禁止与漢族通婚、并分遣代表至各省宣伝、以期恢復故土復興苗族」である。前二者と内容として一致することから、同一の情報源によるものであり、名義上は顧頡剛との共同提案だが、この部分の記述は馬毅によるものと判断される。

(346) 「苗族復興運動」における「苗語」「苗文」「苗書」「苗族服裝」への言及は、一九三四年蒋介石発動の「新生活運動」の辺境への影響として、この時期、貴州を中心に強化されつつあった漢族への同化政策を背景にしていたと考えられる。貴州省で、一九三七年二月に「新生活運動促進会」によって「貴州省各級新生活運動促進会同化苗胞計画大綱」が制定されていること、およびその内容と以後の同化政策については、前掲注27馬玉華『国民政府对西南少数民族調查之研究』を参照。新生活運動については、段瑞聰『蒋介石と新生活運動』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年を参照。

(347) 楊漢先については、龍基成『社会変遷、基督教与中国苗族知識分子—苗族学者楊漢先』、『貴州民族研究』一、貴州省民族研究所、一九九七年、前掲注28伍新福『軍閥和国民党統治下の苗族』、吳運宏ほか『人物列伝(下)』前掲注29『苗族通史』所収、および張兆和『黔西苗族身份的漢文書写与近代中国的族群認同—楊漢先的個案研究』、『西南民族大学学报』三、同大学、二〇一〇年を参照。

(348) 前掲注34龍基成『社会変遷、基督教与中国苗族知識分子』、および前掲注28伍新福『軍閥和国民党統治下の苗族』参照。

(349) 石門坎に関する研究成果として、張坦『窄門』前的石門坎『雲南教育出版社、一九九二年、張慧真『本土知識的建構—近代貴州石門坎花苗族群教育發展的個案研究(一九〇〇—一九四九)』、『教育學報』二六—二七、香港中文大学、一九九八・九九、石茂明『基督徒循道公会在石門坎傳播的社会分析』、『貴州民族学院学报(哲学社会科学版)』三、同学院、二〇〇〇年、東旻ほか主編『貴州石門坎』中国文史出版社、二〇〇六年、沈紅『石門坎文化百年興衰』万卷出版公司、二〇〇六年、沈紅『結構与主体—激蕩的文化社区石門坎』社会科学文献出版社、二〇〇七年、馬玉華『国民政府对貴州石門坎苗民基督教文化的改造政策』、『民国档案』二、中国第二歴史档案馆、二〇〇八年、馬玉華『発現石門坎』、『南京曉莊学院学报』五、同学院、二〇〇八年、および張慧真『教育与族群認同—貴州石門坎苗族個案研究(一九〇〇—一九四九)』民族出版社、二〇〇九年がある。抗戦期の貴州省政府による同化政策の中で、石門坎には帝国主義の根拠地としての疑いの目が向けられる。そして外国人宣教師たちが立ち去った一九四九年以後、焚書をとまなう宗教弾圧にさらされ、今日では中国最貧困地域の一つにまで衰退しているという。

(350) 王建明『現在西南苗族最高文化区—石門坎の紹介』、『康蔵前鋒』四—三、康蔵前鋒社、一九三六年(前掲注34東旻ほか主編『貴州石門坎』に再収録)。

(351) 曹経沉『(篇名不詳)』、『貴州档案史料』一、貴州省档案馆、一九九〇年(筆者未見、前掲注27馬玉華『国民政府对西南少数民族調査之研究』所引)。

苗族史の近代 (六)

- (352) ポラードその人については、Grist W. A., Samuel Pollard: Pioneer Missionary in China, New York: Paragon Book Gallery, 1971、および阿信『用生命愛中国—柏格理伝』大象出版社、二〇〇九年を参照。
- (353) 前掲注249沈紅「結構与主体」参照。
- (354) 江応樑「西南辺区の特種文字」、『辺政公論』四—一、辺政公論社、一九四五年一月（江応樑『西南辺疆民族論叢』珠海大学出版社、一九四八年に再収録）。
- (355) 一九三〇年代のHudspeth, W. H., *Some Gateway and the Flowery Miao*, London: The Corgate Press, 1937（筆者未見、東人達訳注「石門坎与花苗」柏格理ほか著・東人達ほか訳注『在未知的中国』雲南民族出版社、二〇〇二年所収。以下の内容は謝世忠、Hmong／苗族の生存機制」前掲注240謝世忠「国族論述」所収によるものである）は、祖先が黄河以北に居住していた時には文字があったが、漢人に駆逐されて河を渡った時に船がなく、苗文を書いた本を肩に背負って対岸に泳いでいったところ、水流が激しくて本を流されてしまい、以後苗族は文字を失った、とする石門坎(Stone Gateway)の花苗の伝説を記録する。一方、近年のSchein, Louisa, "Miao/Hmong Textile Arts: Costume and Commerce", *Focus on Asian Studies*, 4(3), 1985（筆者未見、前掲謝世忠『国族論述』所引）は、タイのHmong（苗族の一支）難民が、Hmongにはもともと自分の文字があったが、漢人に使用禁止を強制され、こっそりと字体をスカートやベルト上に刺繍して代々伝えたものの、文字そのものの意味については早くに失われてしまった、とする伝説を語ったことを紹介している。後者は、本文中で紹介した江応樑所引の伝承と基本的な筋書きが一致し、それがそのまま今日に伝存したと理解すべきである。江応樑所引の伝承は、時期的にも内容的にもちょうどこれら二つの伝承の間に位置する。Hudspethの記録するものが、本来の伝承内容であった可能性が高い。
- (356) 楊漢先「基督教在滇・黔・川交界一带苗族地区史略」貴州省民族研究所編『民族研究參考資料』十四、同研究所、一九七九年。原文は「一九〇九年……苗族の唱歌与吹笙就被停止了、不管山歌（恋愛歌）・史歌・故事歌、一概停止。原来苗族是最喜歡唱歌的、但從此只能唱『頌主聖歌』了、苗族原有的一切歌都不能唱了、……直到二十年代中期、思想進步的知識青年、提出應該恢復民族遺產、研究民族歷史、于是逐漸在婚姻喜事場合上唱起史歌和故事歌來。由于二十多年的禁錮、苗族史歌遺失很多、因為二十多年中、老歌手死去不少、活下的也由于多年不唱、已忘去大半。到三十年代又提倡搜集、并且用苗文記錄下來保存了部分。……一九三一年秋、由于日本帝國主義侵略我國東北、發生了『九一八事變』……苗族青年學生愛國、愛民族的思想逐漸增長。在讀中國歷史中、涉及到苗族歷

史時、很自然地要追溯一番、但漢文所述苗族歷史太少。有的人却想到、苗族老年人會唱歷史故事歌這是很好的史料、可是基督教來了後都被禁止唱了、除了老年人記得一部份、幾乎已忘掉了、這不是忘本嗎。這時、有的苗族青年提倡要恢復唱歷史故事歌、從此、每逢婚姻喜事都請老年人教唱歷史故事歌、逐漸地便把苗族歷史故事歌恢復過來。漸而一些青年也會說會唱自己民族的歷史歌了。後來有的使用苗文記下。進入三十年代和四十年代、大家都爭取請老年人把苗族史歌「傳給後代」である。

- (357) 夏揚『涿鹿之戰』、『金沙江文芸』二・三、雲南省楚雄州文聯、一九八三年(夏揚『苗族民間敘事長詩・苗族古歌』、德宏民族出版社、一九八六年、筆者未見、王永才(貴州赫章縣)『苗族遷徙歌』一九八五年收集(潘定衡ほか主編『蚩尤的傳說』貴州民族出版社、一九八九年所収)、楊雅各『根支耶老、革繆耶老和耶玖逼蒿的故事』(陸興鳳ほか編訳『西部苗族古歌』雲南民族出版社、一九九二年所収)。なお、田玉隆編訳『蚩尤研究資料選』貴州民族出版社、一九九六年所収の夏揚『涿鹿之戰』和蚩尤解』の記述では、夏揚『苗族民間敘事長詩・苗族古歌』を一九八〇年刊とするが、同文中において、夏揚『涿鹿之戰』の初掲載が『金沙江文芸』二・三、一九八三年とあり、また苗青『苗族圖書介紹之五—苗族史歌与苗族古辭類的書籍』二〇〇六年(中国インターネットサイト「苗族在線」<http://www.jhnmongbi.com/ReadNews.asp?NewsID=489>参照)に夏揚『苗族民間敘事長詩・苗族古歌』を一九八六年刊とする)とから、一九八〇年は一九八六年の誤植と判断した。

- (358) 前掲注357王永才『苗族遷徙歌』。

- (359) 楊漢先『貴州省威寧県苗族古史伝説』、『貴州民族研究』一、貴州省民族研究所、一九八〇年(前掲注2胡起望ほか編『苗族研究論叢』に再収録)。

- (360) 前掲注357陸興鳳ほか編訳『西部苗族古歌』の出版にあたって、石門坎苗族信徒の王明基収集の苗歌資料を、その息子である王建国から提供を受けたことが重要な背景となったことについては、王建国の息子である王文憲(談)「王文憲老師訪談」前掲注361沈紅「結構与主体」所収を参照。

- (361) 前掲注360楊漢先『貴州省威寧県苗族古史伝説』。この論文が、当時の公定苗族史の形成過程において重要な役割を果たし、苗族史の起点が「五溪蛮」から「三苗」にまで引き上げられ、さらに蚩尤と関連付ける方向性が生まれたことについては、賀国鑑「関于「苗族簡史」族源問題的争論—兼答張永国先生の商榷」貴州苗学研究会主編『苗学研究』二、貴州民族出版社、一九九一年、および小文第十三章での議論を参照。なお、貴州西北部から雲南東北部にかけての地域以外では、蚩尤と関連付けるべき苗歌や伝承に乏しい。

例えば、湘西苗族では、今日、貴州西北部の「格蚩爺老」などと同様に、湘西苗語で「剖尤」「普尤」と漢字音表記されるものを「尤公」と漢訳し、さらに蚩尤と解釈することが通例である。ところが、湘西の清代地方志には、江南における三苗との関連説のみで、蚩尤との関連説は確認できず、蚩尤に関連する地方伝承も見られない。前章で述べた石板塘の苗歌や、石宏規の著作に見られる蚩尤起源の苗族先住説については、漢籍・中国語文献を通じて創作、もしくは引き写しの受容に他ならず、伝統的な苗歌を反映したものであるとする証拠はない。凌純声の依頼で石啓貴が調査し、中央研究院歴史語言研究所に提供した一九三〇年代の湘西苗族の祭祀に関する記録には、数々の祖先崇拜にかかわる祝詞が含まれているにもかかわらず、「剖尤」「普尤」に相当する字句は見当たらない(石啓貴編著『湘苗文書』一九三三—三七年(後に石啓貴編著『民国时期湘西苗族調查実録』民族出版社、二〇〇九年として刊行)。すでに述べたように、石門坎においては、一九二〇年代半ば以後、徐々に苗歌が復活したとされる。各地苗族社会に残る伝統文化に蚩尤に関する解釈が織り込まれる状況は、貴州西北部から雲南東北部にかけての地域が先導し、他地域ではそれに連動して新たな解釈が現れた可能性が高い。

(362) 楊漢先「威寧花苗歌樂雜談」『社会研究(期刊)』五、(大夏大学社会研究部)、一九四〇年七月十日(前掲注30)呉沢霖ほか『貴州苗夷社会研究』所収)。

(363) 楊漢先「大花苗歌謠種類」『貴陽時事導報・社会研究(副刊)』五七、一九四二年八月二五日(前掲注30)呉沢霖ほか『貴州苗夷社会研究』所収。「蚩尤元老が力沐平原で戦い、泊水を渡り、南下した」の歌詞の字句については、一九四二年の『貴州苗夷社会研究』原刊本にも見られ、二〇〇四年の再刊時に誤植や書き換えは確認されない。

(364) 陳国鈞「石門坎的苗民教育」『貴陽時事導報・教育建設(副刊)』二〇、一九四二年八月十九日(前掲注30)呉沢霖ほか『貴州苗夷社会研究』所収)。

(365) 前掲注29沈紅「結構与主体」参照。

(366) 前掲注95傅連森『高等小学校 共和国教科書 新歴史』ほか。

(367) 王興中ほか「威寧石門坎光華小学校史梗概」貴州省宗教志編寫辦公室編『貴州宗教史料』二、同辦公室、一九八七年(前掲注29)沈紅「石門坎文化百年興衰」所引)。

(368) 全体苗族信徒暨石門坎全体学生「苗族信教史碑文(苗文)」『苗族信教史老苗文碑文』一九一六年八月十日(楊明光「基督教循道公

会伝人威寧地区史略」貴州省宗教志編寫辦公室編『貴州宗教史料』二、同辦公室、一九八七年所引（筆者未見、東夏ほか主編『貴州石門坎—開創近現代民族教育之先河』中国文史出版社、二〇〇六年に再収録）、同一の碑文内容は前掲注24張坦『「窄門」前的石門坎』に転載。前掲楊明光『基督教循道公会伝人威寧地区史略』は、苗文で刻まれた当該碑が、漢文で刻まれた李国鈞（李約翰）撰『溯源碑』（二九一四年石門全体学生立）とともに、文化大革命中に壊されたことを明らかにし、また譚仏佑「威寧県石門坎教会苗民教育述評」『貴州民族研究』一、貴州省民族研究所、一九八三年（筆者未見、前掲東夏ほか主編『貴州石門坎』に再収録）は、当該碑の苗文が、一九七九年以後、張斐然氏によって、現地の「苗文碑殘石」にもとづき、断続的に漢訳されたものであることを明らかにしている。なお、東人達「蚩尤史迹探評」『畢節師專專報』四、畢節師範高等専科学校、一九九七年、および東人達「訳者説明」前掲注35『在未知的中国』所収には「溯源碑」の内容として、「我々苗族は、実は中国の古い民族であり、祖先たちは長期にわたり中原に住んでいた。祖先たちの歌にはこのようにある、我々はどこから来てどこに行つた、と。以後、荒野に暮らす人となり、国家も政府もまったく管理することはなかった」という、本文での引用碑文と相似するものが紹介されている。両テクストの間には、一部の内容に食い違いも認められるが、いずれの場合も、苗族が中国の古族であったが故地を離れて流浪したとする苗族史観に立って本碑文が記されていたという点については相違しない。なお、東人達氏が「溯源碑」とするのは「石門坎苗族信教史碑」との混同と推測される。

(369) 「苗族信教史碑」（前掲注36）に、苗族の歴史の裏付けを「古詩」に求める記述がある点は重視すべきである。「古詩」とは歌い継がれた苗族固有の歴史伝承を指すものであろう。石門坎において伝承を歌うことが禁じられたとされる時期に、その記憶が石に刻まれて残されたという評価も可能である。

(370) Hudspeh, W. H., "Hwa Miao of Yunnan and Kweichow", *The Chinese Recorder*, Vol. 62, No. 4, Shanghai: The Editorial Board Headquarters, 1931 を参照。Hudspeh（王樹徳）は、一九一〇年から一九三六年まで石門坎で布教に従事した（前掲注36東人達「訳者説明」参照）。

(371) 前掲注35金国光「略憶参加「西南夷苗族解放大同盟」前後」。

(372) 前掲注342参照。

(373) 教育部史地教育委員会編『教育部史地教育委員会概況』二、出版地不明、一九四一年。同会議については、無記名「辺疆教育委員会第一次全体大会」『辺政公論』一一二、辺政公論社、一九四一年、教育部教育年鑑編纂委員会編『中国教育年鑑』第二次、商務印書

館、一九四八年、および前掲注110顧頤剛『顧頤剛日記』四を参照。教育部史地教育委員会については、前掲教育部教育年鑑編纂委員會編『中国教育年鑑 第二次』のほか、王煦華『抗日戰爭期間的中国史学会』、『歷史文獻』四、上海科学技术出版社、二〇〇四年、桑兵『二十世紀前半的中国史学会』、『歷史研究』五、社会科学雜誌社、二〇〇四年、および桑兵『傅斯年与抗戰時期的中国史学会』、『傅斯年与中国文化』天津古籍出版社、二〇〇六年を参照。

(374) 前掲注33教育部史地教育委員会編『教育部史地教育委員会概況』二所収。原文は、「五四以来、至於七七、中經民国十五年之北伐与民国二十年之九一八事变、我国文化界趨勢、已由破壞而趨於建設、由審問明辨而趨於折善固執、由融會中西而趨於新的本位文化之建樹。過去支離破碎之學風、与直接間接染帝國主義麻醉之毒素、宜亟藉此時機、一為釐廓。最近于院長右任主張、改印度支那半島之旧名為中南半島、又本部边疆教育會第二次全体會議、亦議決此後本國歷史教科書中、勿再沿載華族驅走苗族之無稽傳說、皆為同一方向之良好措施。甚宜普遍改革、奠定新基、使今後中国国民所習之史地学科為兼合於科学真理及民族需要之学科、而白鳥庫吉・勒鄒得諸氏有意造作之『堯舜禹抹殺論』、『中国人為白種・黑種之混血』等等譏言、得以永絕根株、藉以加強自信、鞏固團結」である。

(375) 一九四一年に、監察院長于右任によって、インドシナ半島を「中国の南にあり」「中国と南洋の間にある」ことを示す意味で「中南半島」と呼ぶよう、新たな呼称が提唱された。于右任「中南半島之範圍与命名問題」『大公報』一九四一年二月九日(筆者未見、無記名「中南半島之命名」『史地雜誌』二一一、国立浙江大学史地系、一九四二年所引)参照。原文は、「先就歷史言、『半島』自有史以来、早為中国政治文化勢力所及之地、……再以其種族而言、『半島』上諸民族皆我中華民族旁系、有密接之血縁、故『半島』与中国之關係、可謂厚矣。……今改『半島』之名曰『中南半島』、足以使國人紀念警惕、表示其地居中国之南部、亦指示半島在中国与南洋之間。除彰明其重要之外、並使國人發憤、知抵抗日本南進之為自衛、視半島之安危有如中国本身焉、則幸甚矣」である。この背景にあつたのは、日本の南進政策であるが、それは同時に、一九三九年のタイの国名變更に始まる大タイ主義への警戒の反映でもあつた。タイの国名變更と大タイ主義については、次節の議論を参照。

(376) 前掲注33教育部史地教育委員会編『教育部史地教育委員会概況』二所収。原文は、「(前掲注35参照)、『又暹羅亦稱滇黔為秦族故居、改秦之後、即有倭寇、操縱利用種族問題妄作種種企圖』、『故欲消除辺胞團結之障礙、泯滅煽拐之口実。此漢族驅逐苗族之荒唐傳說必須訂正、否則辺教愈普及辺民程度愈高、而種族間仇恨反而益深、与融合情感團結國族之企圖、実南轅而北轍』、『辦法一、教育部從新訂正各級學校歷史教本、根拠最近甲骨陶器之研究結果、証明漢族為黃河流域土著、並未驅逐庄迫任何民族。就章大炎之『排滿平議』、

呂思勉之『中國民族史』、及顧頡剛『辺疆』中發表之文章、以証明古之三苗非今之苗族。此種伝説一經厘訂、則民族間假想の人為之仇恨、可不致發生。然後推行辺教、庶不致發生相反作用、而与教育部規定之『關於國族精神』、『注意講解民族融合史』之目地(的)、正相吻合である。

(377) 前掲注343馬毅「堅強『中華民族是一個』的信念」、および前掲注344馬毅「苗夷教育之檢討与建議」。

(378) 前掲注343馬毅「堅強『中華民族是一個』的信念」。原文は、「日寇假借『民族自決』製造了偽滿洲国、吞侵了我們東三省。他還要製造偽大元国、在土耳其・印度聯絡某部分人、又預製造偽回回国(英国亞細亞雜誌五月号)、在暹羅宣伝滇桂為掸族故居、而鼓動其收復失地。(前掲注343參照)這是我們民族團結的謠賊」「我們還要糾正史書与伝説的錯誤、徹底消滅敵人利用離開的口實。史書上一個荒唐的故事、漢族西來、黄帝戰勝蚩尤、驅逐苗族而扼有黄河流域、造成兩民族的暗影、其實遠古伝説年代荒渺本難憑信。……漢族為中国北部的土著、由於現代甲骨・陶器的發現与科学的研究已竟証實。最近『北京人』遺骨之發現、扼協和医学教授達衛生之研究、謂与現代華北人之體質同属一派、可知在五千年前黄河流域已為漢族繁殖之区。……大家都是土著民族、漢族並不會侵略苗族同胞的土地。

……苗漢中間假想的歷史仇恨、自然因研究而肅清無遺」「自称漢族、並非驕柔、称苗裔、也非鄙視。……四裔名称加蟲犬字旁、亦無鄙賤之意。……古之三苗、非今之苗族。……(章太炎『排滿平議』)……(呂思勉『中國民族史』)這些宝貴的見解、美足够祛除民族間無謂的隔膜。可惜近来、研究歷史的人、或是懶惰因襲旧史、或是好博採群說、自炫淵博、還不能正確的採用這些見解、遺誤民族團結、影響是很大的。這是個錯誤、應該即時矯正」である。

(379) 前掲注344馬毅「苗夷教育之檢討与建議」、および王一影「泛論辺疆夷族青年的教育与訓練」、『辺政公論』一一三・四、辺政公論社、一九四一年参照。

(380) 前掲注373教育部教育年鑑編纂委員會編「教育會誌」参照。

(381) 顧頡剛との連名で上記議案が提出された一九四一年六月の教育部第二屆辺疆教育委員會第一次全体會議の開催に先立っても、その直前の一九四一年三月から四月に重慶で開かれた国民党第五屆中央執行委員會第八次全体會議で、主席団提議による「關於加強国内各民族及宗教間之融洽團結以達成抗戰勝利建国成功目的之施政綱要」(無記名「第八次全体會議重要決議案」)中国国民党中央委員會党史委員會編『革命文獻』八十 中国国民党歴屆歴次中全會重要決議案彙編二「同委員會、一九七九年、および無記名「八中會議通過之辺疆施政綱要」、『辺政公論』一一一、辺政公論社、一九四一年)が通過していることが確認される。これが馬毅・顧頡剛による提案

の前提となつたと考えられる。

(382) 前掲注287参照。

(383) 前掲注282参照。

(384) 社会部については、土田哲夫「抗戦期の国民党中央党部」中央大学人文科学研究部編『民国後期中国国民党政権の研究』中央大学出版部、二〇〇五年を参照。

(385) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館蔵『史語所檔案』・昆三一五b「鈔錄大衆文化社原呈（一九三九年一月九日）」、「總辦事処来函（一九三九年一月三〇日）」。なお、中央社会部からの委嘱を受けた中央研究院歴史語言研究所の答申の結果、一九四〇年四月になり、學術研究で個別の民族呼称に言及する場合、「虫獸鳥偏」は「人」偏に、この原則に当てはまらないものは「同音之仮借字」に変更するよう通達がなされている。無記名「西南少数民族糾正称呼—廢除猪・蛮・獯称呼、概以其屬地名之」、『申報』一九四〇年四月十三日を参照。史語所のスタッフで、この一連の作業の中心となつたのは、芮逸夫であつた。この問題については、彼が一九四〇年八月に昆明東北郊の龍泉鎮宝台山で執筆した、芮逸夫「西南少数民族蟲獸偏旁命名考略」、『人類学集刊』二、国立中央研究院歴史語言研究所、一九四一年（後に芮逸夫『中国民族及其文化論稿』藝文印書館、一九七二年に再収録）を参照。龍泉鎮の史語所については、前掲注287拙稿「中国民族論と抗戦下の雲南」を参照。

(386) 一九三九年八月二三日に中央研究院總辦事処から史語所に宛てた文書に、「案奉国民政府廿八年八月廿一日渝字四七〇号訓令内開…案抛行政院二十八年八月十五日呂字第九二二二号呈称、抛教育部呈称、查我民族、文化血统、混合已久、不能強为分析、歷史記載斑斑可考。後因輾転遷移、環境懸殊、交通隔絶、語言風習、遂生歧異。在專制時代對於边疆同胞、視為附庸化外、实行其割裂封鎖之政策、民国以来、国人復受敵方惡意宣傳、在心理上、已遺留本国内有若干不同民族之錯誤觀念、於是相沿成習、往往仍妄用含有侮辱性質之蛮番夷獯猓獯之稱謂、加諸边疆同胞。在呼之者固易□藐視之心、而聽之者尤易起愧惡之感、是無異自行分散我整個民族、殊与總理倡導民族主義之本旨相背繆。国民政府前抛蒙藏委員會委員格桑沢仁提議、曾通令禁止用番蛮等稱謂、加諸西藏人民、以矯正陋習、昭示平等、時逾十載、不独積習未除、益以近來国内人士、遂漸注意边疆問題之故、不妥名詞之使用、有日趨擴大之勢。即以西南边疆同胞而論、竟有二百余种不同之名稱、広西省政府雖曾將獯猓獯等字、改為徭徭僮等、以示平等、但不同民族之痕跡、仍未見泯除、竊意若專為歷史及科學研究便利起見、固不妨照広西省前例、將含有侮辱之名詞、一律予以改訂。而普通文告、及著作、宣伝品等、對

於辺疆同胞之称谓、似应以地域為区分、如内地人所称、某某省人等、如此則原籍蒙古地方者、可称为蒙古人、原籍西藏地方者、可称为西藏人、其地雜居於各省辺僻地方人、文化差異之同胞、似亦不妨照内地人分為城市人鄉村人之習慣、称为某某省辺地或辺県人民、為尽量減少分化民族之称谓。本部（「教育部」）召集之第三次全国教育會議、对于辺疆教育問題、認為应以恢復中華整個民族之信念除界限為目的。凡足以妨害民族團結者、均應設法避免、以期矯正過去之錯誤觀念、經大會決議、請本部（「教育部」）轉呈中央通令全國、以後對於苗夷蠻獠猺獞、以及少數民族等名稱、禁止濫用紀錄在卷。理合備文呈請鑒核轉呈採納施行、實為公便等情。理合呈請鑒核、通令查禁等因」とある（中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏『史語所檔案』・昆三一四八「總辦事処来函（一九三九年八月二三日）」）。中央研究院總辦事処から史語所に宛てた別の文書には、「案奉國民政府訓令、以後對於西藏民族、不得再沿用番蠻等称谓、以符中華民族一律平等之旨、切切此令等因」という記述が見られるものがあるが（中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏『史語所檔案』・元五七一—一二b「總辦事処来函（年不明）十月十一日」）、所在地として南京の表記を持つ「国立中央研究院總辦事処用箋」に書かれていることから判断すると、これは前掲檔案（昆三一四八）中の「國民政府前擬蒙藏委員會委員格桑沢仁提議、曾通令禁止用番蠻等称谓、加諸西藏人民、以矯正陋習、昭示平等」とするものに相当し、「時逾十載」という記述からは、一九二九年にすでに一度、チベット（西康）エリートへの要請を受け、チベットだけを対象とした伝統的呼称の禁止令が出されていたと推察される。格桑沢仁（ケサンツェレン）については、平野聡「近現代チベット史における『親中』の位相」毛里和子編『現代中国の構造変動』七 中華世界—アイデンティティの再編（東京大学出版会、二〇〇一年を参照。なお、國民政府渝字第四七〇号訓令については、岑家梧論民族与宗族『辺政公論』三二四、辺政公論社、一九四四年にも引用がある）。

(387) 広西通志編纂委員會『広西通志・民俗志』広西人民出版社、一九九二年。

(388) 川島真「中華民国北京政府外交部の対シヤム交渉」『歴史学研究』六九二、青木書店、一九九六年（「中国近代外交の形成」名古屋大学出版会、二〇〇四年）、余定邦ほか『中泰關係史』中華書局、二〇〇九年参照。

(389) 太炎（章炳麟）「中華民国解」『民報』十五、一九〇七年七月。章炳麟「中華民国解」については、坂元ひろ子「章炳麟における伝統の創造」前掲注50『京都大学人文科学研究所七十周年記念シンポジウム論集 西洋近代文明と中華世界』所収、前掲注3坂元ひろ子『中国民族主義の神話』、および前掲注3王柯『二十世紀中国の国家建設と「民族」』を参照。

(390) 前掲注109孫文「三民主義」。

(391) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏「史語所檔案」・昆三一三三「總辦事処來函(一九三九年七月二二日)」。原文は、「攄駐暹羅商務委員會陳守明呈稱、暹羅國務院長鑾披汶於本年六月廿四日正式公布暹羅國改為『泰國』(Thailand)、暹羅人改為『泰人』(Thai)……。該院長並於晚作廣播講演、演詞中、述明泰人之謀生、因農商業實權落於外人之手、使暹人將成餓殍、現泰人應以商業救國、從今日始、當於外人競爭、生為泰人、應先購泰人之物。又謂、僅見少數報紙敢攻擊中國人在我國內有過分之愛國行動。吾人亦從外人所辦之外國報紙見有泰人攻擊府之文字。迨後又謂、古代『泰族』在中國中部被漢族驅逐退出、其時泰人具有堅強之愛國心、後被他族血統混合、而使泰血漸淡薄、泰血薄弱、遂使鼓勵愛國增加不少困難、英明之六世王曾著『泰族醒吧』等詩詞、以促泰人覺悟。本人敢於今日懇請泰族同胞、熱心愛國、一如文明民族、然後共同驅除各種有害愛國意志、如混種與直接或間接以身心及言語破壞我族之行為者云云。查鑾披汶演詞之誇張自大、其排華態度、較前尤為顯著等情」である。

(392) 前掲注391「總辦事処來函(一九三九年七月二二日)」。原文は、「查旅暹華僑、人數衆多、與暹羅民族在歷史上血統上既關重要、而在經濟上尤佔位置、卑為暹人所忌視。當暹羅醞釀改名之初、本部曾電謁該商務委員呈稱、暹芸術厅长鑾威集於本年四月十一日奉鑾披汶緊急命令、乘機往河內博物院發現有關於泰族史蹟之古物、並稱有指明泰族在中國之確切出生地或原居地、及目前泰族在中國散居各區域之說明函、鑾威集回暹後於五月廿五日請廣播演講、演詞內引美人多特博士 Dr. Dodd 所著 *The Tai Race* 內載泰族散居於我國廣西省者約有八百万人、貴州約有四百万人、雲南約有六百万人、廣東約有七十万、四川約有五十万人、廣東瓊州約有三十万人、單就中國西南各省、共有泰族一千九百五十万人、其余法屬安南約有二百万人、英屬緬甸約有二百万人、連同暹羅之一千三百万人、總計泰族共有三千六百五十万人、若再行調查、其數當不止此。又云、泰族人雖散居各地、至今仍說泰語、習泰文、其所穿之衣服、善用泰族之藍色、多特博士在中國泰族人所散居之區域傳教時、該地泰人尚自認爲獨立、不肯學習華文、且有要求博士教授泰文者。本年美國 Stracuse 大士 George B. Cressey 教授往中國考察後、所著之書、內容亦与多特博士所說者雷同、並指明泰族婦女未有纏足、且与華人疏隔、甚或自立標識、表示獨立。故本人此次演講、係促泰人對自身之獨立自由、相互合作、以增進國家繁榮云云。是此次暹羅改名、不独与華僑在暹地位有莫大影響、抑且有分化我西南邊境一部份之苗族、蠶食我辺区之企圖。顯有日人從中挑発、含有國際陰謀。蓋彼現可利用暹人与我爲難、將來尤可爲其實施南進政策時牽制英法之工具。究竟關於暹羅所稱之泰族、其來歷及与中國之關係如何。允宜詳予研究、以資因応。爰特函達貴院、即請賜予研究」である。

(393) ピブーン、ルアン・ウィチットその人と、タイの国民形成政策については、市川健二郎「タイ民族史における国民形成」江上波夫

教授古稀記念事業会編『江上波夫教授古稀記念論集 歴史篇』山川出版社、一九七七年、張映秋「評披汶政府的十二個通告」中山大學東南亞歴史研究所編『東南亞歴史論文集』同研究所、一九八四年、村嶋英治「現代タイにおける公的國家イデオロギーの形成」『國際政治』八四、日本國際政治学会、一九八七年、村嶋英治「タイ国における中国人のタイ人化」岡部達味編『ASEANにおける國民統合と地域統合』(財)日本國際問題研究所、一九八九年、Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1994 (石井米雄訳「地図がつくったタイ」明石書店、二〇〇三年)、玉田芳史「タイのナショナルリズムと國民形成―戦前期ピーン政権を手がかりとして」『東南アジア研究』三四―一、京都大学東南アジアセンター、一九九六年、村嶋英治「現代アジアの肖像 九 ピーン―独立タイ王国の立憲革命」岩波書店、一九九六年、および村嶋英治「タイ国の立憲革命期における文化とナショナルリズム」池端雪浦ほか編『岩波講座東南アジア史 七 植民地抵抗運動とナショナルリズムの展開』岩波書店、二〇〇二年を参照。

(394) 前掲注393 Thongchai Winichakul, *Siam Mapped* 参照。

(395) 前掲注393 玉田芳史「タイのナショナルリズムと國民形成」参照。

(396) 前掲注393 村嶋英治「タイ国における中国人のタイ人化」参照。

(397) 前掲注393 村嶋英治「現代アジアの肖像」参照。

(398) ラッタニヨム各条文は、前掲注393 張映秋「評披汶政府的十二個通告」およびThinaphan Nakhata, "National Consolidation and Nation-building (1939-1947)", *Thai Politics: Extracts and Documents*, Bangkok: The Social Science Association of Thailand, 1978 を参照。

(399) *École Française d'Extrême-Orient*, "Chronique de l'Année 1939", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, 39(2), Hanoi: *École Française d'Extrême-Orient*, 1940 を参照。陳守明が報告の中で言及した「博物院〔極東学院〕」の「説明図」については、後にタイが仏印と対立した時に「ラオスに撒いたというヒラに」「ハノイにいる学者セデスが、中国と我国タイの年代記を研究して」「我々はすべてタイである。ことを証明したように、フランス人は実直さを好む。ハノイの極東学院が編集したインドシナの四番の地図には、我々はすべてタイであることが記されている。タイはすでに約四千年前に登場している民族である」(菊池陽子「一九四〇年代初期のラオスに対するタイの宣伝活動とフランスの対応」根本敬編『東南アジアにとって二十世紀とは何か』東京外国語大学アジア・

アフリカ言語文化研究所、二〇〇四年)と記されていた内容と関連付けて理解できよう。この推測が妥当であれば、陳守明が報告したルアン・ウィチットの視察成果の発言は、専ら仏印を意識してなされたものであったことになる。

(400) 前掲注333 *Thongchai Winichakul, Siam Mapped* 参照。

(401) 村嶋英治「一九四〇年代におけるタイの植民地体制脱却化とインドシナの独立運動」磯部啓三編『ベトナムとタイ—経済開発と地域協力』大明堂、一九九八年。

(402) ワチラーウット王時代の対華僑政策については、前掲注333村嶋英治『現代アジアの肖像』参照。

(403) 一九四〇年、タイ政府が『ペンテーイー・プラワット・アーナーケート・タイ (*Phuenhi prawi-anakhet-thai*・タイ国国境歴史地図)』を作成し、全国の学校・政府機関に配布しているが、中タイ両国間で懸案となる可能性を持つ中国領のタイ族地域(シブソンパンナー、西双版纳)でさえ、その地図が示す範囲には含まれていなかったという。ただその一方で、一九三六年から一九三六年にかけて防衛省管轄下の王立測量局によって作成された『タイ(シヤム) 国歴史地図』と呼ばれる六枚一セットの地図集には、華北方面から南下する路線を記した「古代から近代にいたるタイ民族の移動経路を示すタイ歴史地図」と、雲南省方面を「Nongsae (南詔) 王国」として大きく取り込んだ「南詔王国を示すタイ歴史地図」が含まれていたとされ(前掲注333 *Thongchai Winichakul, Siam Mapped* 参照)、また一九四三年にタイ軍は『泰国古代史考』『現代的暹羅』などの書を西双版纳各地に空から撒いた」という(李拂一『十二版納紀年』著者自刊、一九八四年(筆者未見、謝世忠「傣泐—西双版纳的民族現象」自立晚報文化出版部、一九九三年所引)参照)。

(404) 前掲注13 Lacouperie, 'L'arien de, "The Cradle of the Shan Race", 1885 参照。前掲注31「総辦事処來函(一九三九年七月二二日)」において、ルアン・ウィチットが演説の中で引いたとされる *The Tai Race* という著書は、Dodd が一九一三年に行なった現地調査の資料を、彼の妻が整理して一九二三年に刊行したものであり、それがラクペリーの研究に代表される十九世紀末的な民族史論の系譜を引くものであることは、冒頭にラクペリーの著書の一節を引用していることによっても明らかである。

(405) ダムロン親王による、タイ族の起源地を中国南部とし、漢族に駆逐され南下したとする民族史論については、王又申訳「暹羅古代史」商務印書館、一九三一年を参照。ダムロン親王の「原序」の内容を踏まえ、吉川利治「創られる歴史像—近現代に見るタイの国家意識」『東南アジア史に見る国家意識』『総合的地域研究』成果報告書シリーズ 十二、文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班、一九九六年における近代タイの公定史の成立過程についての議論を参照すると、これはダムロン親王が一九

二四年六月二八日から四回にわたって、チュラーロンコンン大学でシャム歴史の講義を行なった講義録『シャム王朝史講義録』が、大学の月報に連載されたものの中国語訳と考えられる。ダムロン親王を中心とするタイ国史の構築過程については、小泉順子『歴史叙述とナショナルリズム—タイ近代史批判序説』東京大学出版会、二〇〇六年をあわせて参照。

(406) 陳序経『進歩的暹羅』、『独立評論』二三五、独立評論社、一九三七年(余邦定ほか編『陳序経文集』中山大学出版社、二〇〇四年に再収録)。

(407) 村嶋英治『タイ華僑の政治運動—五・三〇運動から日中戦争まで』原不二夫編『東南アジア華僑と中国』アジア経済研究所、一九九三年、および李盈慧(光田剛訳)『王精衛政権と重慶国民党によるタイ華僑組織争奪戦』前掲注20松浦正孝編『昭和・アジア主義の実像』参照。

(408) 前掲注409村嶋英治『タイ華僑の政治運動』、および李盈慧『王精衛政権と重慶国民党によるタイ華僑組織争奪戦』参照。

(409) ピーン政権が「失地」を含む歴史地図を配布していた当時、中国国内ではそのタイを中国の「失われた疆域」の一部とする「国恥図」が複製再生産されていた。「国恥図」については、黄東蘭『清末・民国期地理教科書の空間表象』『中国研究月報』五九一三、中国研究所、二〇〇五年を参照。

(410) 新生活運動については、前掲注36段瑞聡『蒋介石と新生活運動』を参照。

(411) 前掲注36参照。

(412) 辺境地域におけるタイ系民族の実態を明らかにする必要がある外交部は、タイと近接する雲南省政府に、省内南部のタイ系民族の現状についての調査を命じ、それを受けた雲南省民政庁は、南部各県の県長に調査を行なうように通達(雲南省档案館档案…一〇一一一十三「雲南省政府秘外字第五三七号訓令(一九四〇年四月二五日)」〔筆者未見、前掲注21馬玉華『国民政府对西南少数民族調査之研究』所引)、民政庁では「雲南省倭(擺夷?)族人民調査表」を特別に用意し(雲南省档案館档案…一〇一一一十三「雲南省民政庁参三字第四四四号密令(一九四〇年五月十五日)」〔同前〕)、それに基づいて一九四〇年五月から翌年七月にかけて、五十一の県で調査が進められた(馬玉華『国民政府对西南少数民族調査之研究』参照)。

(413) 陳序経『暹羅与汰族』、『今日評論』二一一、今日評論社、一九三九年六月(前掲注40余邦定ほか編『陳序経文集』に再収録)、王家禎『暹羅改称泰国与中暹問題』、『外交研究』一一五、外交問題研究会、一九三九年九月(筆者未見、杜瑜ほか編『中国歴史地理学論著

索引(一九〇〇—一九八〇)』書目文献出版社、一九八六年所引)、『顧銘堅(顧頡剛)』《中国人応注意暹羅的態度》、『新中国日報(成都)』一九三九年十一月十五日(筆者未見、顧潮編著『顧頡剛年譜』中国社会科学出版社、一九九三年所引)ほか。

- (44) 実際にタイ軍が中国国境まで進攻するのは、日本軍に追隨してビルマのシャン州に駐屯した後、一九四三年一月になってからのことである。タイ軍のシャン州に対する軍事行動については、村嶋英治「タイの歴史記述における記念顕彰本性格——一九四二—四三年におけるシャン州外征の独立回復救国物語化をめぐって」、『上智アジア学』十七、上智大学アジア文化研究所、一九九九年を参照。タイ軍が中国国境の境界碑を越えて雲南省側の国境の町、打洛まで侵入し、今日の境界碑よりも中国領内に入った位置にある打洛河を国境とすることを主張し、打洛河を挟んで重慶政府軍と対峙し続けたという点については、無記名『傣族人民の反帝闘争』《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編『西双版纳傣族社会総合調査 一』雲南民族出版社、一九八三年を参照。ビルマのシャン州については、高谷紀夫「民族の『仲間』意識と『よそ者』意識——ビルマ世界におけるシャンの視角」飯島茂編『せめぎあう「民族」と国家』アカデミア出版会、一九九三年、および新谷忠彦編『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社、一九九八年を参照。

- (45) 民族史論をめぐる緊張関係は、タイ族の源流だけではなく、古代「越族」についても現れた。一九二三年、フランス極東学院のオルソー(Leonard Arousseau)は、秦始皇帝が設置した象郡をめぐって歴史地理的議論を行ない、その中で「安南人」すなわち現在のベトナム人が、すなわち古代の南中国に広く分布した「越族」の末裔であるとする説を提出した。一九三三年には中山大学の羅香林も、「古代越族」文化に関する議論を展開し、「古代越族」が歴史的に「非中国人種」であると論断した。羅香林はその中で、「中国南部の……甌は即ち安南民族」とする極東学院のフランス人学者シャパンヌ(Douard Chavannes)の説を引き、それに追隨するのみならず、シャパンヌの欠を補完するための論証を重ねたのである(羅香林「古代越族考上篇」『国立中山大学文史学研究所月刊』一一、同研究所、一九三三年)。ところが一九三九年になると、羅香林は「越族の源流は夏民族に出自する」と題する論文の中で、「越族」は漢族と同じ「中夏(中華)」系統の民族であると主張し、さらにそれを補完する論文をまとめ、「中夏系統中之百越」という書名で刊行するに至っている(羅香林「越族源出於夏民族考」一九三九年(羅香林「中夏系統中之百越」独立出版社、一九四三年所収))。

(46) 小文第六章を参照。

- (47) やがて戦争の終結が近づくと、さらに周辺地域の歴史の「回収」を積極化させるよう求める主張も現れる。中央研究院歴史語言研

究所傅斯年圖書館藏『傅斯年檔案』・Ⅳ一五九二「請求教育部通令各大學於抗戰勝利後正式建立『亞洲史』案(吳其昌提議)」(年月不明)には、「整個亞洲、除阿剌伯・波斯・日本以外、可以說完全以『大中華民族』為主幹的分支、或分國、或混血民族。故在亞洲各國各民族、寔際為我中国的叔伯、或兄弟。例如……東北民族之遷入朝鮮半島、閩粵民族之遷入中南半島及南洋等、均有確實不虛的史實、決不容吾人忽視。宜酌採重要的國族研究或講授其歷史。……東亞各國研究的領導權、應急從敵人手中收回。日本於明治二十三年時已確立『東洋史運動』、今我國已遲至四十餘年之□□未確定、應迎頭趕上急起直追」とある。「亞洲史」の語句は、草稿中の「東亞國群史」が修正されている。本議案およびそれと一括ファイルされた各文書には、いずれも年月表記がないが、文書の中に「本会第一次全体會議議決編輯中国史叢書」という記述があることから、教育部史地委員會會議の資料であることが明らかである。同委員會第一次會議の議決内容については、前掲注37教育部教育年鑑編纂委員會編『中国教育年鑑 第二次』参照。本文書の各議案は、『中国教育年鑑 第二次』に記される第二次會議の議決内容と一致しない。『中国教育年鑑 第二次』には第二次會議までしか記録されていないが、前掲注37王煦華「抗日戰爭期間的中国史学会」が指摘するように、顧頡剛の記述(前掲注10顧頡剛『顧頡剛日記』五)によれば、一九四三年三月二四(二五)日に傅斯年も参加して教育部史地教育委員會第三次全体大会が開催されている。そして、それに続いて翌二六日に開かれた「中国史学会」の理監事會の出席者中に、吳其昌の名前が確認できるのである。吳其昌は一九四四年に死去しているから(前掲注27徐友春主編『民国人物大辞典』参照)、当該史料は第三次會議の會議資料の他に考えられない。この推測は、本議案の表題が抗戦末期を示唆する点とも符合する。吳其昌は、終戦を見越して、東アジアにおける歴史学の主導権を、中国学术界が日本から取り上げるため、各大学でのアジア史教育を充実させることを、中国政府に提案したのである。なお同時期の日本国内において、文部省教学局の主導により「大東亞史」の編纂がなされていたことについては、宮崎市定「序文—シナ史からアジア史へ」島田虔次ほか編『アジア歴史研究入門 一』同朋舎、一九八三年、および長谷川亮一「皇国史観」という問題」白澤社、二〇〇八年を参照。

(418) 当時の昆明社会の様子については、Chiang Moulin, *Tides from the West*, New Heaven: Yale University Press, 1947 (蔣夢麟『西潮』中華日報社、一九六一年)、馮友蘭『三松堂自序』三聯書店、一九八四年(吾妻重二訳『馮友蘭自伝 Ⅰ』東洋文庫七六七、平凡社、二〇〇七年)、および前掲27拙稿「中国民族論と抗戦下の雲南」を参照。

(419) この問題については、芮逸夫、「中華民族解(一九四二年)」(前掲注36芮逸夫「中国民族及其文化論考」所収)、前掲注17村田雄二郎

「中華ナショナリズムの表象」、費孝通「顧頡剛先生百年祭」、『紀念顧頡剛先生誕辰一一〇周年論文集』中華書局、二〇〇四年、田亮『抗戰時期史学研究』人民出版社、二〇〇五年、Leibold, James, *Reconfiguring Chinese Nationalism: How the Qing Frontier and its Indigenous Became Chinese*, New York: Palgrave Macmillan, 2007、周文玖ほか「關於『中華民族是一個』學術辯論的考察」、『民族研究』三、民族研究雜誌社、二〇〇七年、前掲注 島田美和「顧頡剛の『疆域』概念」、および黄天華「民族意識与国家觀念—抗戰前後關於『中華民族是一個』的論争」、一九四〇年代の中国『社会科学文献出版社、二〇〇九年など、とくに近年になり、おもに顧頡剛に注目した論考が数多く発表されているが、小文ではあえて馬毅論文を軸に、西南民族の側からの問題として、本論争に対する分析を試みた。

(420) 前掲注 馬毅「堅強『中華民族是一個』的信念」。原文は、「歴史学者、完全無視這些事实与陰謀、不知国族之危亡、還坐在象牙塔里、憑主觀来研究他的史学。歷史的任務本是民族教育的工具、教歷史有著特殊目的、所以亡人国必先禁禁纂改其歷史。歷史是著之於事实的深切著明的民族主義的宣揚。中国学者許多都是矜奇立異、疑古乱今、自炫淵博、忘記研究学問的目的、這種態度是要不得的」「如果仍然持續歷史上的錯誤、不但見智識的淺陋、与事实脱了節、也辜負了研究歷史的意義。繼承這錯誤的傳統、等於替帝国主義修改歪曲我們民族史、擾乱自己統一抗戰的親密性、便利他們侵略、無異作文化的漢奸。我們應該立時退出狹隘的以訛傳訛從前錯誤的民族觀念樊籠、發揚這光輝燦爛五千（年）親愛團結自然混合世界上最偉大的中華民族。揚棄歷史上荒誕故事的傳說、否定帝国主義拐騙誘惑的詭譎陰謀、由新的質變、才能够達到正確的全民結合、以答復日寇無賴的挑発、堅強『中華民族是一個』的信念、向我們抗戰建国神聖民族解放闘争光明前途邁進」である。

(421) 無記名「歴史語言研究所報告（一九三九年三月）」国立中央研究院文書組編『国立中央研究院民國二十六年度至二十八年年度總報告（国立中央研究院總報告 第九冊 民國二十六年度至二十八年年度）』国立中央研究院總辦事処、一九三九年（？）。史語所が龍泉鎮移転当初、棕皮宮の響応寺・龍頭書場に所在したことについては、中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏『史語所檔案』…考三〇—五三「本所廿九年由昆明至南溪遷移始末」の「二年來本所在昆明龍泉鎮之經營」（年月不明）に、「二年來本所在昆明龍泉鎮之經營」本所自二十七年春、由長沙遷來昆明後、即在青雲街靛花巷三號辦公。至同年九月廿八日、捲遭敵機襲瀆。本所為保全公物及增加工作□□起見、遂由城內遷至龍泉鎮辦公。初□擠於一小破廟內、既拓展至四処。…響応寺在龍泉鎮北之棕皮宮村。南倚宝台、北瀕金汁、不但風景□雅而交通亦称便利。龍頭書場者乃其西塾舍也。兩処毗連且相通、其中一部為該村小学校舍。…修理弥陀殿及十間樓…弥陀殿

在宝台山上、院□寬敞、屋宇宏大、……初為城内疏散者新任、無法租得、後因空襲□□多返城内、故於廿八年四月乃得租。十間樓者乃弥陀殿之東廂也。西廂早毀、此院僅有大殿及東廂。大殿（弥陀殿）既得、而東廂為住持和尚及財斤孫科長所居、數度交涉不得要領、終於為和尚建新房、代科長寬宅屋、乃於廿八年八月一日起租。……初至龍泉鎮時、全集中於響応寺及龍頭書場、後□逐漸扩充、每部均有適當地址。歷史組（第一組）設於觀音殿新建之九間房。語言組（第二組）設於弥陀殿之十間樓。考古組（第三組）設於龍頭書場。人類組（第四組）設於普惠庵。庶務・會計及所長辦公室設於響応寺。圖書室則分三館、西文館設於響応寺之觀音殿内、中文館設於宝台山上之弥陀殿、善本館設於宝台山之觀音殿、每館均有書庫及閱覽処とあり、當時の傅斯年の自宅については、同『史語所檔案』…昆十五—三一—二「本所函龍泉鎮鎮公所」（一九四〇年）に、「傅斯年、四十五（歲）、趙崇義院内新建之房、……梁思永、三十七、棕皮宮趙崇義院内新建之房。……凌純声、四十、龍頭村王朝龍院内、……芮逸夫、四十、棕皮宮段嘉福院内」とあつて、やはり棕皮宮に所在したことが判明する。

(42) 凌純声・芮逸夫「序言」前掲注32凌純声・芮逸夫『湘西苗族調查報告』には、「序於昆明龍泉鎮宝台山本所」とある。凌純声・芮逸夫が宝台山上の「弥陀殿」「廂房」を研究室としたことは、石璋如述『石璋如先生訪問紀錄』中央研究院近代史研究所、二〇〇三年に「宝台山上還有一個弥陀殿、又高大又漂亮、有一边的廂房是二層樓房、於是下層就讓二組（語言組）使用、樓上由四組（人類組）的文化部分（就是民族学的）搬到二層樓上去」という記述から判明する。前掲注41「二年來本所在昆明龍泉鎮之經營」には、一九三九年八月にそこを借り得たことが記録される。「序言」の「宝台山本所」とは、弥陀殿廂房の二階を指すものと推察される。

(43) 小文第七章参照。

(42) 顧頡剛「序」『浪口村隨筆』上海合衆圖書館油印、一九四九年（一九四八年遼寧教育出版社再刊）、顧頡剛「小引」『史林雜識初編』中華書局、一九六三年、前掲注10『顧頡剛日記』四、および前掲注29拙稿「中国民族論と抗戦下の雲南」を参照。

(45) 前掲注39「傅斯年先生致顧頡剛先生函稿（一九三九年）二月一日」。原文は、「一週之内、時思走訪、而未果也。心中有一事、擬以上告、借供參攷。此事關係不小、公私皆不能默爾也。吾等到此、本不能一律抄統在北平時之旧習」「有兩名詞、在此地用之、宜必謹慎。其一為『辺疆』、……其次即所謂『民族』。猶憶五六年前敝所刊行凌純声先生之赫哲族研究時、弟力主不用『赫哲民族』一名詞。當時所以有此感覺者、以『民族』一詞之界說、原具于『民族主義』一書中、此書在今日有法律上之効力、而政府機關之刊物、尤不応与之相違也。今來西南、尤感覺此事政治上之重要性。夫雲南人既自白只有一個中華民族、深不願為之探本追源、吾輩羈旅在此、又

何必巧立各種民族之名目乎。今日日本人在暹羅宣佉桂滇為泰族」[註]。故居、而鼓動其取復失地。英國人又在緬甸拉攏國界內土司、近更取納華工、広事、傳教。即迤西之仏教、亦有其立國之邪説、政府必加之禁止、如「白国原由」、其一事也。則吾輩正當曰「中華民族」(是一個)耳。至於閉戸作學問、以其結果刊為不能流行之學術刊物、更或供政治之參考、自當一秉事実、無所顧慮、然不當使其民衆化也。此間情形、頗有隱憂、迤西尤甚。但當嚴禁漢人侵奪蕃夷、並使之加速漢化、並制止一切非漢字之文字之推行、務于短期中貫徹其漢族之意識、斯為正図。如巧立民族之名以招分化之実、似非學人愛國之忠也。基此考量、以數事供之吾兄。一、「辺疆」附刊之名、似可改為「雲南」・「地理」・「西南」等、「辺疆」一詞廢止之。二、此中及他処、凡非専門刊物、無普及性者、務以討論地理・經濟・土産・政情等為限、莫談一切巧立名目之民族。三、更當尽力發揮「中華民族是一個」之大義、証明夷漢之為一家。並可以漢族歴史為証。即如我輩、在北人誰敢保証其無胡人血統、在南人誰敢保証其無百粵苗黎血統、今日之雲南、實即千百年前之江南・巴蜀耳。此非曲學也。日前友人見上期辺疆、中有名干城者、発論云「漢人殖民雲南、是一部用鮮血來写的争鬭史。在今日、辺地夷民仍時有叛乱情事。」所謂鮮血史、如此人稍知史事、當知其妄也。友人実不勝其駭怪。弟甚願兄之俯順卑見、於國家実有利也」である。

(426) 顧頡剛「中華民族是一個」『益世報(昆明)』一九三九年二月十三日刊(顧潮ほか編校『中国現代學術経典 顧頡剛卷』河北教育出版社、一九九六年に再収録)。当該論文については、前掲注28拙稿「中国民族論と抗戦下の雲南」を参照。

(427) 傅斯年は政府が禁ずべき文献として、仏教復国を説いた「白国原由」を挙げているが、雲南西部の大理の聖元(源)寺の住持であった寂裕が一七〇六年に刊刻し、観音信仰をもとに「白人」(現白族)の「白国」の歴史的由緒を説いたとされる、「白国因由」の誤記と判断した。『白国因由』については、立石謙次「清初雲南大理地方における白人の歴史認識について―「白国因由」の研究」『史学雑誌』一一一・一六、史学会、二〇〇六年、および立石謙次「雲南大理白族の歴史物語―南詔国の王権伝説と白族の観音説話」『雄山閣』二〇一〇年を参照。

(428) 前掲注10顧頡剛『顧頡剛日記』四(一九三九年三月四日・同年四月十五日・一九四〇年二月二三日)。重慶では、国内の民族問題を論ずることを政府が禁止する、顧頡剛の論文が原因だ、といううわさも存在したという(『顧頡剛日記』四(一九三九年三月二二日))。

(429) 前掲注49諸文献、および前掲注43顧潮編著『顧頡剛年譜』を参考にまとめた。

(430) 前掲注49黄天華「民族意識与国家觀念」所引。

(431) 費孝通「關於民族問題的討論(四月九日)」『益世報(昆明)』一九三九年五月一日刊。当該論文についての考察は、前掲注13島田美

和「顧頡剛の『疆域』概念」、黄天華「民族意識与国家觀念」、および前掲注139拙稿「中国民族論と抗戦下の雲南」を参照。

- (432) 前掲注110顧頡剛『顧頡剛日記』四には、「抄孝通論民族問題文、凡五千字、訖」（一九三九年四月二三日）、「草答孝通書約三千言、未畢」（四月二四日）、「擬答孝通書、將胸中所欲言者随手写出」（四月二五日）、「校所抄孝通來書」（四月二六日）、「写擬答孝通書材料竟日」（五月一日）、「重作答孝通書、約五千字。……看孟真開意見、想本文結構」（五月二日）、「作答孝通書三千餘字。……到孟真処送稿。……今日以作文興奮、……遂致失眠」（五月三日）、「孟真派人送昨稿來、即写覆信。……到雲大、訪蘇湖、囑其抄答孝通書」（五月四日）、「起改答孝通書、至上午四時方睡」（五月五日）、「修改答孝通書畢。……到益世報館、……乘車還鄉」（五月六日）とある。また中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館藏『傅斯年檔案』・II—1197『傅斯年先生致瞿先・立武函抄件（一九三九年七月七日）』（前掲注139傅樂成「傅孟真先生的民族思想」に部分的に掲載〔字句に一部異同あり〕）には、「頡剛在此為益世報辦邊疆附刊、弟曾規勸其在少談『民族』『辺疆』等等在此有刺激性之名詞。彼乃連作兩文以自明、其一、論『中国本部』一名詞之不通。其二、論中華民族是一個（即謂不要分漢滿蒙回藏苗獠狼狽等等。其中自有缺陷、然立意甚為正大、實是今日政治上對民族一問題惟一之立場。吳使其弟子費孝通駁之、謂中国本部一名詞有其科學的根柢、中華民族不能說是一個、即苗・獠・猺・獯皆為民族。一切帝國主義論殖民地的道理、他都接受了。頡剛於是又用心回答一萬數千字之長文、以申其旧說」とある。

- (433) ただし、同様な問題意識は、顧頡剛自らによるより早い時期の論説、一九三七年一月に発表されている「中華民族的團結」（前掲注308）にも見え、単に傅斯年の主張の受け売りでないことは明らかである。一九三九年一月の『中国本部』一名亟亟廃棄の趣旨も、また一九三四年の『禹貢』『堯刊詞』（前掲注137）に見える発想であり、「滿洲」の衝撃以来、保持されてきた問題意識である。

- (434) 前掲注42『傅斯年檔案』・II—1197『傅斯年先生致瞿先・立武函抄件（一九三九年七月七日）』。本文での引用部分の原文は、前掲注42を参照。

- (435) 雲南大学の人類学・社会学の創設期については、林超民「応対辺疆危機的新学科—辺政学的興起与發展」、『清末民国社会調査与現代社会科学興起』福建教育出版社、二〇〇八年を参照。雲南大学への中英庚款による講座新設と助成は、一九三八年七月一日に香港で開催された管理中英庚款董事会で決定されているので（胡頌平『朱家驊先生年譜』伝記文学出版社、一九六九年）、傅斯年はその一年後にこの進言をしたことになる。

- (436) 施琳主編『当代中国著名民族学家百人大伝』中央民族大学出版社、二〇〇六年参照。

苗族史の近代（六）

(437) 前掲注431参照。

(438) 傅斯年「中国歴史分期之研究」『北京大学日刊』一九一八年四月十七〜二三日、および前掲注395傅斯年「中華民族は整個的」。

(439) 前掲注432『傅斯年档案』・II—一九一七「傅斯年先生致瞿先・立武函抄件（一九三九年七月七日）」。本文での引用部分は、前掲注399 傅樂成「傅孟真先生の民族思想」に収録されている。

(440) 前掲注92梁啓超「中国歴史上之民族之研究」（一九二二年講演）参照。

(441) 傅斯年「第一章 界説与断限」『中国民族革命史』（未刊稿、中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵『傅斯年档案』・I—170—7）「傅斯年先生『中国民族革命史』第一章（清書）稿」（書体から傅斯年自筆原稿と推察される同I—170—2）「傅斯年『中国民族革命史』第一・四章清稿底稿」によって補正）、前掲注399傅樂成「傅孟真先生の民族思想」に一部引用。原文は、「漢族一名、在今日亦已失其邏輯性、不如用漢人一名詞。若必言族、則皆是中華民族耳。夫族之所以為族者、以其血統相貫、如家族之扩充耳。然漢人之偉大処、正在其血統不单元、歴代之中、無時不吸取外来之血脈、故能智力齐全、保其滋大。……今日西南若干部落中人變為漢人之現象、即我輩先世在千年前經過之現象也。此一無形而有質、常流而若不見之経程、所以延長漢人之命脈者也、所以增加漢人之数量者也、所以使漢人永久適於新環境、経天沢而愈優勝者也」である。なお、本史料については、馬亮寛「傅斯年社会活動与思想研究」中国社会科学出版社、二〇〇九年にも言及がある。

(442) 前掲注441『傅斯年档案』・I—170—2「傅斯年先生『中国民族革命史』第一章稿」には、中央研究院総務処の王敬礼が一九三九年五月十八日に傅斯年に宛てた書簡が添付されており、そこに引用された党史史料編纂委員会からの公文の内容には、「掘本会纂修湯増壁呈、於本月三日職宅遭炸全毀、所有本会与教育部及中央研究院所編之『中国民族革命史』稿、亦被焚燒」という文言が見える。『中国民族革命史』が、国民党党史史料編纂委員会・教育部・中央研究院の三者共同により編纂されたものであり、傅斯年の担当部分は一九三九年五月三日以前に完成していたことが推測される。

(443) 前掲注91傅樂成「傅孟真先生年譜」参照。

(444) 国民参政会秘書処編『国民参政会決議案実施情形一覽』国民参政会秘書処、一九三九年八月。陳守明が、これに先立ち、一九三八年七月に漢口で開催された国民参政会第一次會議において、西南民族を指導し、南洋（東南アジア）の現地民族との連携を画策するよう提案していることは注目に値する。原文は「陳參政員守明等提・請政府注重聯絡南洋諸民族案。辦法：一、外〔交〕部僑委会及

有関機関派專員組機關、設計推進指導西南民族友好之方法。二、令各使館人員研究土人語文、組織社交機關聯絡其社会領袖。……〔大会決議〕原案通過。〔政府決議〕外交部僑務委員會議復（同上）である。

(45) 原文は「居參政員勵今等提・開發西北与西南先施團結蒙藏回苗夷各族案。〔辦法・〕一、創立設治局或指導、或訓政局、辦理蒙藏回苗團結事宜。二、由歷史中找出滿蒙回藏苗血統相同之根拠、以為宣伝、並以國語國文統一各族語言文字、極力設法使其簡陋生活漸進於現代化、極力改除其不良習慣。……〔大会決議〕送請政府參考。〔政府決議〕行政院參考」（前掲注44）國民參政會秘書処編『國民參政會決議案實施情形一覽』である。居勵今による本提案については、前掲注34馬毅「苗夷教育之檢討与建議」および前掲注37王一影「泛論辺疆夷族青年的教育与訓練」にも紹介されているが、第三次會議の開催を四月とするのは、前掲注35郭廷以編著『中華民國史事日誌』によれば、二月の誤りである。

(46) 張庭休「苗夷漢同源論」『中央週刊（重慶版）』一一三三、中央週刊社、一九三九年三月二三日。当該論文については、前掲注24島田美和「日中戦争期榆林における大漢族主義とモンゴル族の自治」に考察がある。

(47) 張庭休「再論夷漢同源」『西南辺疆』六、西南辺疆月刊社、一九三九年五月。

(48) 馮大麟「漢族与西南民族同源論」『中央週刊（重慶版）』二一五・十六、中央週刊社、一九四〇年三月十七日。この時期の学術界において、漢族神話の研究が、西南民族の神話との比較研究という新しい視座を得て、新たな発展を見ていたことは、漢苗同源説との関連で考えるべき点である。重慶の常任俠が発表した「沙坪壩出土之石棺画像研究」『說文月刊』一一一・十一、說文月刊社、一九四〇年は、「苗裔之民」は「中夏原住民族之一」であるとし、「黄帝」がかつて「蚩尤」と戦つて勝つたことは必ずしも「信史」（信頼できる史実）ではないとしても、いにしえにおいては「苗民」もまたかつて「中原」に雜居していたことは信ずべきであるとして、「伏羲・庖犧・盤古・槃瓠」は音訓の通じた一つの語句であつて、漢・苗ともに「盤古之後」であり、両者の神話とともに同源であるとする。昆明の聞一多が発表した「從人首蛇身像談到龍与罔騰」『人文科学学報』一一一、求真出版社、一九四二年および「伏羲与葫蘆」『文芸復興』中国文学研究專号、文芸復興社、一九四八年（聞一多の死後、朱自清が未発表の「戦争与洪水」「漢苗的種族關係」の原稿とあわせて聞一多「伏羲考」〔『聞一多全集』開明書店、一九四八年所収〕として発表）も、「伏羲」と「槃瓠（盤古）」は音義が一つであるとして、もとは一人で漢・苗二民族の「共同始祖」「同姓」であり、同一神であるとする。両者が前提とするのは芮逸夫「苗族的洪水故事

与伏羲女娲的伝説」「人類学集刊」一、国立中央研究院歴史語言研究所、一九三八年であるが、本論文の中で、芮逸夫は伏羲、女娲伝説を苗族から漢族に伝播したものであると評価しており、常任俠・聞一多の仮説とは異なる。以上の諸点については、谷野典之「女娲・伏羲神話系統考」「東方学」五九、東方学会、一九八〇年、中島みどり「訳者あとがき」聞一多著・中島みどり訳注『中国神話』東洋文庫四九七、平凡社、一九八九年、および谷野典之「中原神話考」伊藤清司先生退官記念論文集編輯委員会編『中国の歴史と民俗』第一書房、一九九一年を参照。なお、上記の学説の中で、芮逸夫論文はその「前言」（一九三六年十二月）から、一九三六年夏に行なった中央研究院歴史語言研究所「同人（所員）講習会」における「苗族洪水故事与傺神崇拜」と題する講演の前半部分に相当する内容であることが判明する。一九三九年以後の中国民族論の影響を受けていないことが、苗族から漢族への伝播という発想のユニークさにつながっている可能性がある。また、この仮説が、一九三三年に凌純声とともに行なった湘西苗族調査での着想によるものであることは疑いないが、苗族から漢族への伝播を想定していることからは、芮逸夫の苗族史観が、苗族報告書に掲載された凌純声のものとは異なり、苗族先住説に基づくものであった可能性が暗示される。これもまた注意すべき点である。

(49) 前掲注31蔣中正『中国之命運』。本書が社会経済学者陶希聖の草稿に、蒋介石側近の陳布雷が加筆し、蒋介石自身の推敲を経たものであること、「宗族」論が戴伝賢（希陶）の意見を反映したものであることについては、前掲注31を参照。

(50) 前掲注38岑家梧「論民族与宗族」、岑家梧「貴州宗族研究述略」「辺政公論」三一、二、辺政公論社、一九四四年ほか。

(51) 頤剛（顧頤剛）「来函両通」『益世報（昆明）』一九三九年五月十五日。原文は、「近来有人大倡苗夷漢同源論。我是苗夷之一。我对此問題不贊、也不反对。不過我觀察所得、今日要團結共赴國難、並無須学究們来大唱特唱同源論。我們不必忌諱、苗夷歷史雖無專書記載、但夷苗自己絶不承認是与漢族同源的。同源不同源、夷苗不管、只希望政府当局能給以實際的平等權利。即頤頑安。魯格夫爾啓。四月二十九日」。「值此全面抗戰之時、宣伝故因以認清提高民族意識為主、然負責宣伝の人們不甚注意及「民族」之宣伝。凡有閩國內民族團結之言論應慎重從事、不能隨便抬出来乱喊一陣。近来很多的書刊言論及要人名流的演講、都說「我們是黃帝の子孫」。有些人家門対上也写著、「黃帝子孫不当漢奸」。表面上似乎不錯、詳細地考慮下実在大不对。因為一如此宣伝、即表明抗戰的目的不是為國、乃是為漢族、所謂建國亦是建漢族之國。使蒙・藏・回・夷苗同胞聽了、必然反对。他們也不会跟盲目的跟漢人乱喊的、認黃帝為祖宗的。所以要想團結各民族一致対日、对交相的大漢族主義之宣伝須絶对禁止、以免引起民族間之摩擦、予敵人以分化之口実。編者先生、在所調「國族」口号之下而大倡「黃帝子孫」的政策、我不知我等非黃帝子孫是否應該再出力出錢。請你們將我這点意思登載貴報。……

蛮夷之民魯格夫爾啓。三苗子孫。四月三十日」である。

(452) 前掲注49黃天華「民族意識与国家觀念」も、同様な推測をしている。

(453) 高建群主編『古今黃陵』陝西人民出版社、一九九二年。

(454) 魯格夫爾の投書は、費孝通論文が『益世報(昆明)』に掲載される前の日付を持ち、影響関係は存在はしない。その一週間後の五月七日に、上述の馬毅「中華民族は一つ」の信念を強くしよう」が掲載されるが、魯格夫爾の投書に接した上での執筆であるか否かについては不明である。顧頡剛が魯格夫爾の投書に対する跋文(按語)を書いたのは五月十三日であり(前掲注110『顧頡剛日記』四)、掲載日である五月十五日の二日前である。

(455) 前掲注48顧頡剛(顧頡剛)「来函而通」。原文は、「我們對於魯格夫爾先生的来函、非常表示同情。……我們團結的基礎建築在『團結則生、不團結則死』的必然趨勢上、是建築在同仇敵愾的一致的情緒上、而不是建築於一個種族上、更不是建築於一個祖先上。漢和苗倘使同源、固然很好、就使不同源、彼此團結的情緒也不會發生一點的影響。……至於說『我們是黃帝子孫』、又說『是黃帝子孫不當漢奸』、這是漢人对漢人說的話、而不是对全国人民說的話。……說到漢人是黃帝的子孫、苗人是三苗的子孫、實在都是上了古人的当。本月五日的益世報星期評論上有馬毅先生的一篇『堅強中華民族是一個的信念』、上面很清楚的說明、苗人本名是鬻、宋以後的人無識、才改称为苗、想不到這一字之變竟迷了数十世的人、以為苗人就是和黃帝打仗的蚩尤的子孫了。其實黃帝乃是古人傳說中的上帝之一、並無其人。三苗照尚書的記載來說、他們早已遷到甘肅去了、根本就没有黃帝和蚩尤打仗的事、更沒有三苗子孫留在西南的事。所以漢人自称为『黃帝子孫』固應改正、而魯格夫爾先生自称『三苗子孫』實在也有改正的必要。每一個種族總好拾出歷史上的一个有名的人來作他們的祖先。這原是古人的習慣。我們生在今日就尽可不必這樣了」である。

(456) 顧頡剛の試みも、漢族に駆逐された先住民族であることを民族意識の根底に置くようになっていた西南民族には、まったく受け入れられる余地がなかった。しかし、蚩尤・三苗の子孫であることは譲れないが、「同源」な一つの「民族」(国族)であることは認めるという、魯格夫爾とは異なる西南民族の立場を、湘西苗族の石啓貴に見て取ることができる。一九四〇年、湘西苗族の石啓貴は、憲政導入のための民意機関として開催されることが宣伝されていた国民大会に、「土著民族」枠を新設することを主張した。そしてそれに際し、自らが編集執筆した報告書と、「同源論」を主張する論文を、参考資料として重慶政府に献呈したのである(前掲注27石啓貴、給国民政府主席林森的信)、および前掲注48石啓貴「漢苗同源論」。

苗族史の近代（六）

（457）江応樑「請確定西南边疆政策」『边政公論』七一一、边政公論社、一九四八年三月。